Ⅰ．経　　緯

1．調査に至る経緯

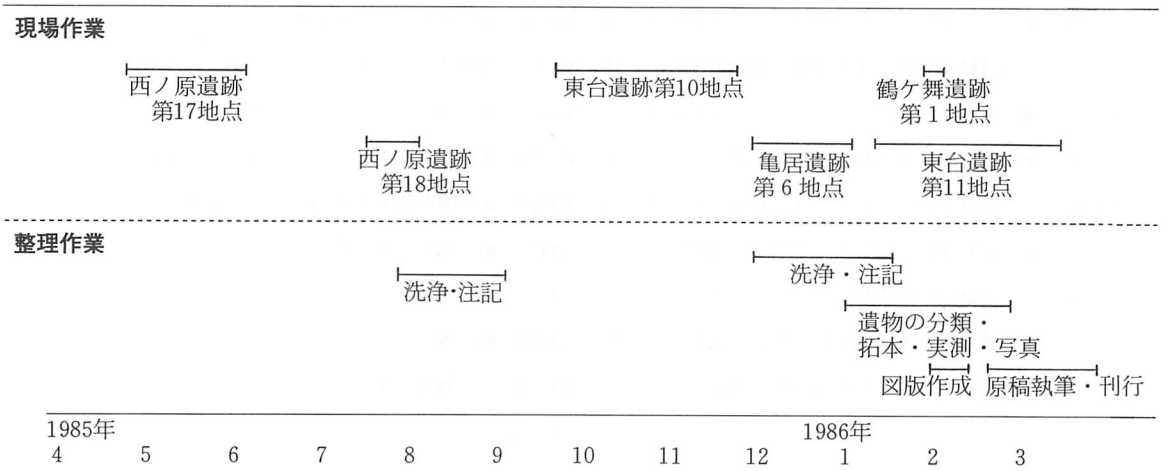
埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置し、畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和30年代後半からのいわゆる地域開発ブームの渦中に、本町もさらされ、スプロール化が進み、建て売り住宅のラッシュが見られるようになった。人口と世帯数は昭和40年前後から急激に増加し，40年から50年の間に人口で約22,000人，世帯数で約 6,600戸が増加した。50年代には，小規模かつ蚕食的な開発が主流をなしていった。当然，これらの開発の波は埋蔵文化財に影響を与え，行政としてその対応が求められるようになった。発掘調査としての対応は昭和52年以降からはじまり，昭和54年度からは，第一次５ケ年計画で国庫及び県費補助による「大井町東部遺跡群発掘調査事業」として実施し，本年は第二次５ケ年計画の２年次にあたる。

東部遺跡群は，文字どおり町の東部地域に集中している遺跡群の総称で，現在40ケ所の埋蔵文化財包蔵地を確認している。昭和60年度の開発行為の中で，埋蔵文化財包蔵地内にかかり，影響を及ぼしたものは以下の６件である。

No.	遺　跡　名	所　在　地	原因者	面積	調　査　期　間
1	西ノ原遺跡第17地点	大井町大字苗間字西ノ原135—3	北沢　明	165m²	昭和60年５月13日～５月22日
2	西ノ原遺跡第18地点	〃　〃 西ノ原141—2	神木　繁信	569m²	〃　７月26日～８月５日
3	東　台遺跡第10地点	〃　大字大井字東台670—1	野溝　繁樹	896m²	〃　10月１日～11月25日
4	亀　居遺跡第６地点	〃　大字亀久保字亀居1,000	関根　政江	914m²	〃　昭和61年12月３日～１月13日
5	鶴ケ舞遺跡第１地点	〃　大字亀久保字鶴ケ舞67—3	土屋みどり	499m²	昭和61年１月28日～１月29日
6	東　台遺跡第11地点	〃　大字大井字東台673	大隅　康雄	660m²	〃　１月14日～３月20日

2．調査事業の経緯

５月13日からの西ノ原遺跡第17地点の発掘調査を皮切りに，調査報告書刊行までの調査事業の経緯は下のとおりである。



微細片を含めて71片の土器が出土したが，深耕による攪乱のため確実に住居址に伴なうものは３片のみであった。土器は文様の明らかなもののほとんどが第Ⅷ群３類（加曽利ＥⅡ）である。炉出土土器，１は小形深鉢の口縁部で，口唇直下に沈線をめぐらせＬＲ縄文を地文とし磨消しによる蛇行懸垂文が口唇直下から垂下する。２は無文中形浅鉢の口縁部で，口唇直下外面に凹線をめぐらせ，口縁内側上面に幅３㎝に朱塗がある。
床面出土土器，炉近くの床面直上から出土した３は中形深鉢でＲＬ縄文を地文とし磨消懸垂文を作る胴部片である。
表土中の土器，４は小形深鉢，５は中形浅鉢のいずれも口縁部片である。８～15は縄文を地文とし広い磨消懸垂文をもつ類で，６は口唇直下破片であり，長円形刺突文がめぐる中形深鉢と推定される。17～22は地文縄文のみの胴細片である。23・24は細い弧状条線を地文とする胴片で４類である。28～34は無文浅鉢又は深鉢無文部胴片である。
石器（９図36）使用による磨耗の著しい磨石であり，石材は硬砂岩であり，長径89㎜。短径82㎜。厚さ最大部で29㎜である。

Ⅳ　東台遺跡第10地点

1.　遺跡の立地と環境

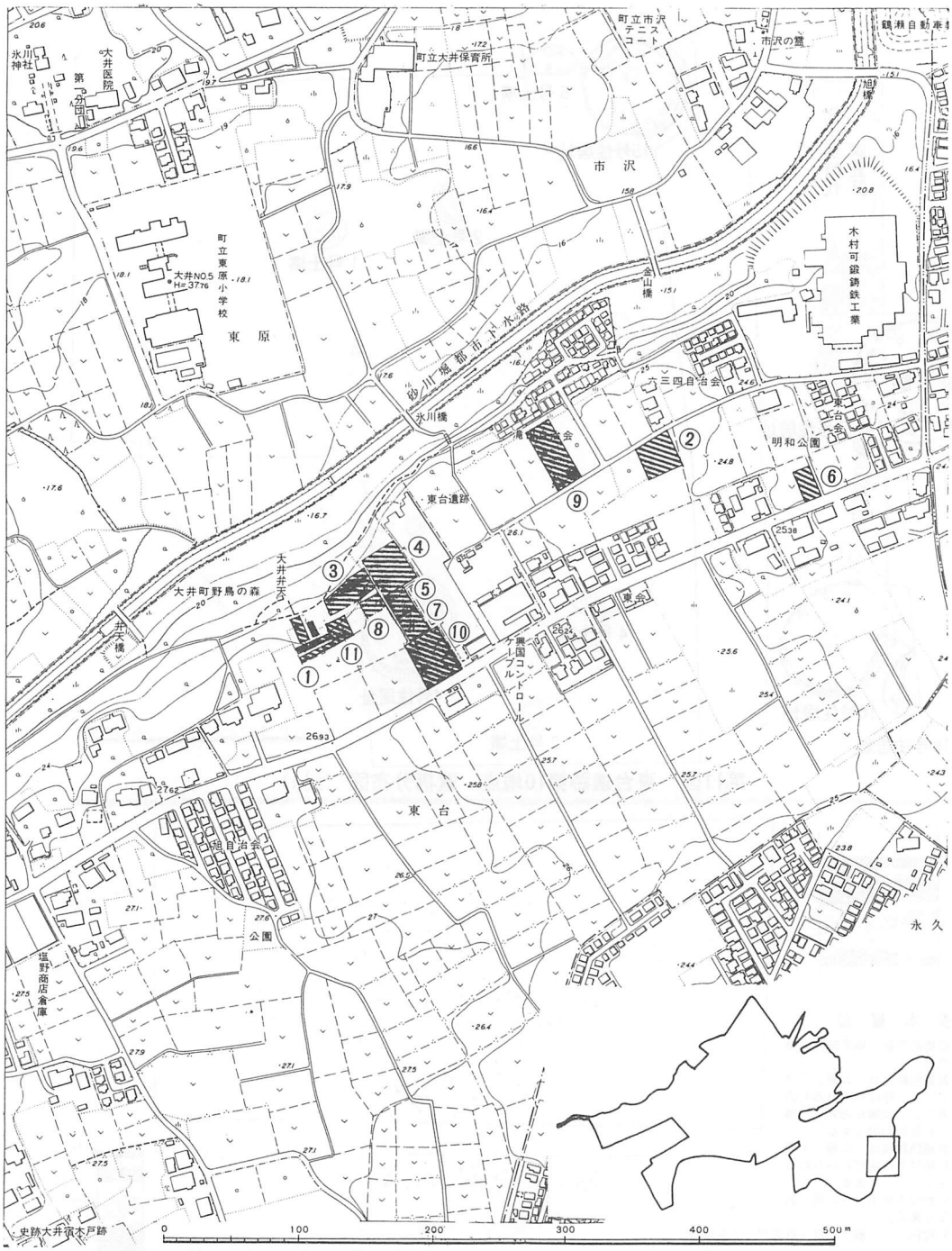
東台遺跡は，平坦地形が続く大井町にあってはもっとも比高差（６ｍ）のある台地縁辺部に，帯状に分布する町内最大の縄文時代を中心とする遺跡で，町の東南部に位置する。この遺跡をのせる武蔵野台地の遺跡周辺での標高は25～26m で，これより東へ約 1.5㎞行くと沖積面（標高６ｍ）につながっている。本遺跡は不老川と柳瀬川に囲まれた段丘崖上に位置し，付近のボーリング柱状図から関東ローム層の厚さは武蔵野ローム＋立川ロームで4.75m で下位には武蔵野礫層が重なり，武蔵野面に相当していることがわかる。

遺跡周辺は，畑地がひろがり開発の速度は緩いが，遺跡の東側は昭和40年代後半の宅地化の波にあらわれ，住宅も目立つ。本遺跡の発掘調査は，1981年に行なわれ，これまでに先土器時代・縄文時代早期・中期・後期，平安時代の遺構や遺物が大量に確認され，特に住居址は55軒検出され，町内を代表する遺跡として注目されるようになってきた。

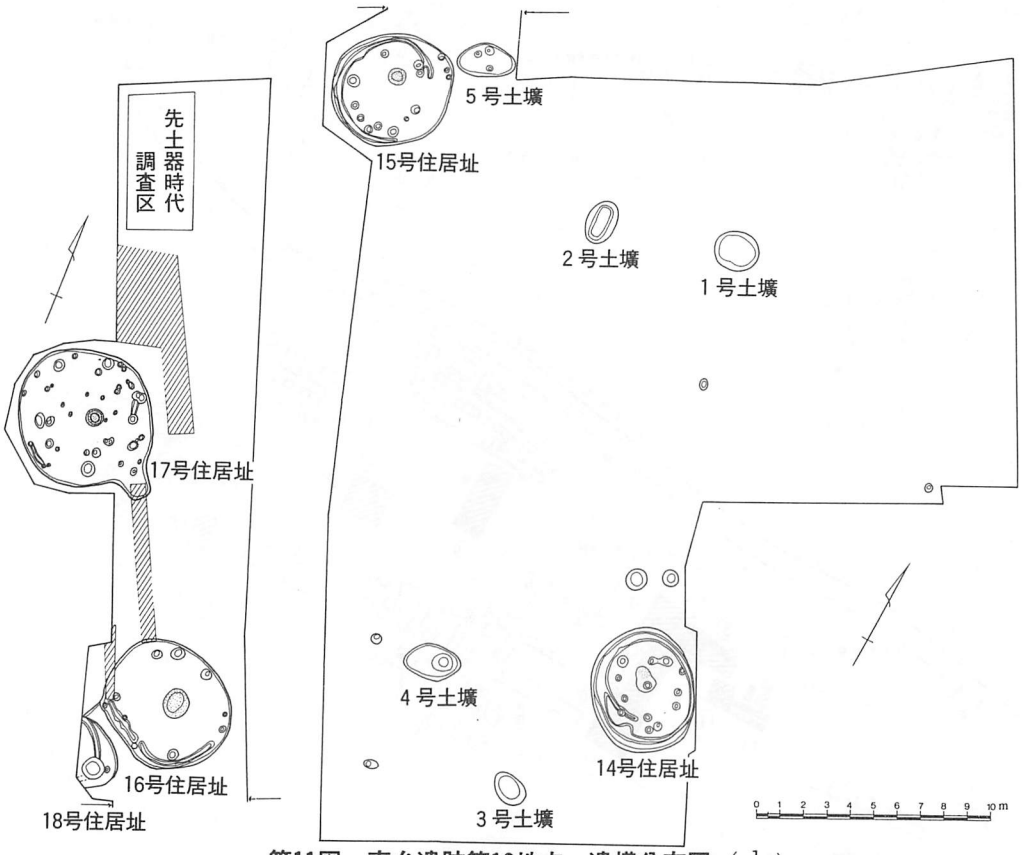
2.　調査の概要と経過

第10地点は，第５・７地点に隣接する区域で，当初，南半分の調査を実施した。表土を除去した段階でも，遺物はきわめて少なく，既調査結果からみても疑問視して調査を行なった結果，調査区南東部隅で縄文時代中期後半の住居址１軒と，土壙４基，柱穴６本を検出した。その後，北半分の細長い調査区を調査した結果，狭い面積であったが，４軒の縄文時代中期の住居と土壙１基が確認できた。調査区北側の一部は重機による掘削がされて

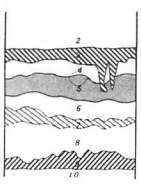
1. 遺跡の立地と環境

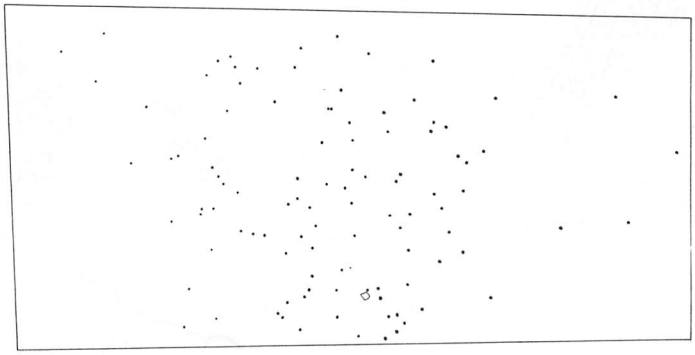


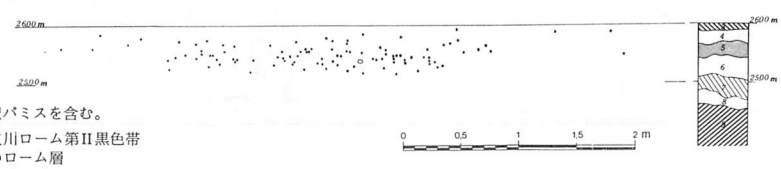
第10図　東台遺跡の地形と調査区 $\left(\frac{1}{5,000}\right)$　数字は調査地点を示す。



第11図　東台遺跡第10地点　遺構分布図（$\frac{1}{300}$）







基　本　層　位

第２層：暗褐色土層，縄文時代遺物包含層
第３層：黄褐色軟質ローム層。ソフトロームと呼ばれているものである。この層から先土器時代の石器群が出土する。
第４層：黄褐色軟質ローム層。上層との境は不連続面がみられるハードロームである。
第５層：いわゆる立川ローム第１黒色帯である。
第６層：明褐色ローム層。始良・丹沢パミスを含む。
第７層・第８層：暗褐色ローム層。立川ローム第Ⅱ黒色帯
第９層：黄褐色ローム層。粘性の強いローム層
第10層：橙暗褐色ローム層。赤色粒子がめだつ

第12図　東台遺跡第10地点　先土器時代遺物分布（$\frac{1}{60}$）

東台遺跡住居址一覧表

Ⓐ炉体土器　Ⓑ埋甕　Ⓒ床直土器

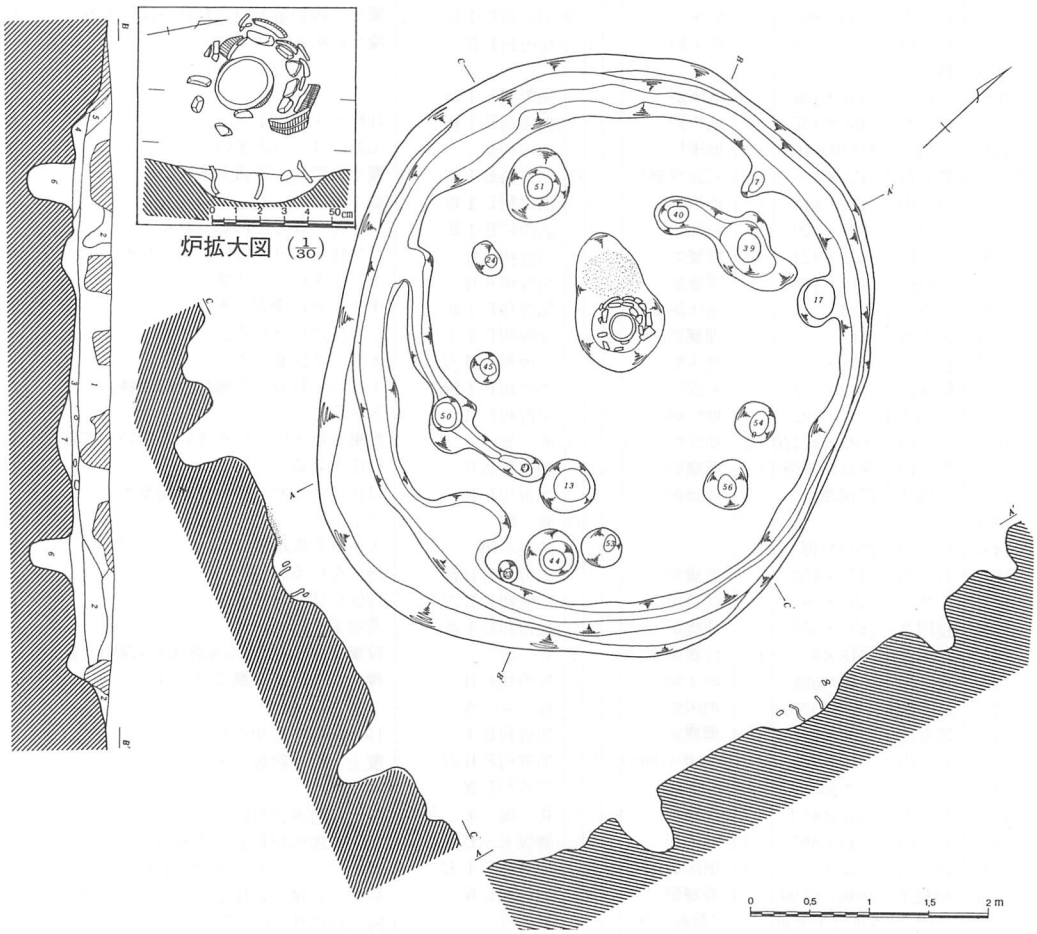
住居址番号	形	規模	壁溝	炉	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ	時期	備考
2地点1号	円	550	○	石囲炉				加曽利EⅠ新	覆土に連弧文
2号	円	400		石囲炉			○	加曽利EⅠ古	
3号	円	510	○	石囲・地床炉	○		○	加曽利EⅠ新	上層に称名寺式。有孔つば付土器
4号	隅丸方	700×750	○	地床炉2			○	加曽利EⅡ	覆土に連弧文多い。
5号	円	460×470		地床炉				加曽利EⅡ	
6号	円	420×430		地床炉				加曽利EⅡ	
7号	円	510×525	○	地床炉2			○	加曽利EⅡ古	投棄土器多い。連弧文多い。
8号	隅丸方	530×465	○	地床炉			○	加曽利EⅠ新	7号住に切られる。有孔つば付土器
9号	円	約500		地床炉				加曽利EⅡ	
10号	円	410×400		攪乱	○			加曽利EⅠ新	
11号	円	410×420		地床炉				加曽利EⅡ	覆土に連弧文多い。
12号								加曽利EⅡ？	
4地点1号	円	695×600		埋甕炉	○			加曽利EⅠ新	覆土に曽利系多い。
2号	円	480×460	○	地床炉				堀之内Ⅰ	
3号	隅丸台	700×615	○	地床炉2			○	加曽利EⅠ古	覆土に早期・阿玉台多し。有孔つば付土器
4号	円	500×500	○	埋甕炉	○			加曽利EⅠ新	
5地点5号	長円	460×430		埋甕炉	○	○		加曽利EⅠ新	覆土に曽利系多い。
6号	長円	450×410		石囲炉			○	加曽利EⅡ古	覆土に連弧文系多い。
6地点1号	円	300×270		地床炉				加曽利EⅢ	
7地点7号	長円	380×390		地床炉2			○	加曽利EⅠ新	覆土に曽利系多い。有孔つば付土器
8号	長円	395×325		地床炉			○	加曽利EⅣ	覆土に称名寺式多い。
9号	楕円								
10号	円	406×406		地床炉			○	加曽利EⅠ新	
11号	長円張	486×437	○	地床炉2		○	○	加曽利EⅠ新	耳栓・土錘出土
12号	円	約420×408		地床炉				加曽利E	土器のばらつき多い。
8地点13号	隅丸台	450×460	○	石囲埋甕炉	○	○	○	加曽利EⅠ新	覆土に曽利・連弧文多い。
9地点1号	円張出	430×418	○	地床炉		○	○	加曽利EⅠ新	拡張
2号	円	514×520		石囲炉				加曽利EⅠ新	7号住・3号住に切られる。
3号	長円	525×424	○	埋甕炉	○			加曽利EⅡ	2号住を切り4号住に切られる。
4号	長円円	478×422		埋甕炉	○	○	○	加曽利EⅡ	3号住を切る。伏甕
5号	円	523		地床炉2				加曽利EⅠ新	中・上層に準完形多い。
6号	隅丸台	517		埋甕炉	○	○	○	加曽利EⅠ中	5号住に切られる。
7号	長円	658×583	○	地床炉			○	加曽利EⅡ古	8住・2住を切る。
8号	隅丸台	482×462	○	石囲炉			○	加曽利EⅠ新	7に切られる。下層に大形浅鉢。
9号	円？	切×292		地床炉				加曽利EⅡ	8を切る。
10号	長円	622×約470	○	地床炉			○	勝坂	投棄土器多い。完形多い。深い・拡張。
11号	長円	東は区域外	○	埋甕炉	○	○		加曽利EⅡ	12住を切る。
12号	長円？	西南攪乱	○	埋甕炉	○	○		加曽利EⅡ	11住に切られ，10号住を切る。
13号							○	勝坂	タブリか
14号	長円	部分発掘						時期不明	大半は対象地外
15号	長円	473×450		埋甕炉	○		○	加曽利EⅡ新	16住を切る。
16号	？	切×563		埋甕炉	○	○		加曽利EⅡ古	15住に切られる。
17号	長円？	切×532		埋甕炉	○		○	加曽利EⅠ新	遺物多くない。
18号	長円	618×472	○	埋甕炉	○		○	勝坂	投棄土器多い。完形朱塗多い。深い・拡張。
19号	長円	573×525	○	地床炉			○	加曽利EⅡ	覆土に押形文土器 20号住に切られる。
20号	柄鏡	？×520		地床炉		○		称名寺	
21号	隅丸方	720×628	○	埋甕炉	○	○		加曽利EⅠ	19・20号住に切られる。
22号	長円	510×540		地床炉石囲炉	○	○	○	加曽利EⅡ古	覆土上層に勝坂式多し。
23号	円	西半部不明		石囲炉	○	○		加曽利EⅣ	
10地点14号	長円	510×450	○	埋甕炉	○		○	勝坂末	覆土に阿玉台多い。
15号	長円	545×495	○	地床炉				勝坂末～EⅠ	覆土に加曽利EⅠ新式多い。
16号	長円	575×520	○	地床炉	△	○	○	加曽利EⅠ末	覆土に三戸式・子母口式あり。
17号	柄鏡？	(640)×590		埋甕炉	○			加曽利EⅣ	称名寺EⅣ　EⅡ多い。
18号	円？	大部分未発掘	○	(調査区外)			○	阿玉台	阿玉台以外1片のみ。
11地点19号	円	770×750		20号住で破壊			○	加曽利EⅡ	20号住に床面中央切られる。
20号	柄鏡	390×(570)		石囲炉	○	○	○	加曽利EⅣ	敷石・テラスをもつ。
				土器囲炉					

おり，それによる攪乱にも及んでいた。また，北側隅で先土器時代の調査のために深掘区を設定し実施したところ細剝片，石核等が検出された。

3.　遺構と遺物

調査により，先土器時代の遺物と，縄文時代中期後半の住居址４軒と土壙５基を検出した。先土器時代については第12図のような出土状態を示し，細片等を含めて 104点を確認した。出土層位は３～６層にかけてで，５・６層境で比較的まとまって出土した。詳細については別に紹介したい。以下，縄文時代の遺構と遺物について列記する。

(1)　14号住居址（第13図）



第13図　東台遺跡第10地点　14号住居址（1/60）

(1) 14号住居址（第13図）

調査区南隅部から検出された。

規　模　長径 510cm，短径 450cmのほぼ楕円形を呈する。遺構確認面から床面までのの深さは約25cm。長軸方位N—26°—W

床　面　全体に平坦で，全体に硬化面が広がり，特に炉周辺が顕著である。

炉　住居址の中央部よりやや北側に位置。規模は長径120cm，短径75cm，中心部の深さは，20cmほど掘り込んでつくられ，径８～15cm，厚さ５～10cm前後の円礫を円形にめぐらせ，さらにその外側を土器片で囲んでいる。その内径は40～45cm前後である。また炉の中央に，胴部下半部を欠く炉体土器が埋設されていた。焼土の範囲は，炉の西側により径50cm程度で焼土厚は５cm前後である。

柱　穴　総数11個検出，壁溝内にも小ピットが検出された。主柱穴は８本と思われる。

壁　溝　幅25cm前後，深さ５～10cm，壁直下をほぼ全周するが南側でテラスをもち，一部で二重にめぐる。拡張のためであろうか。

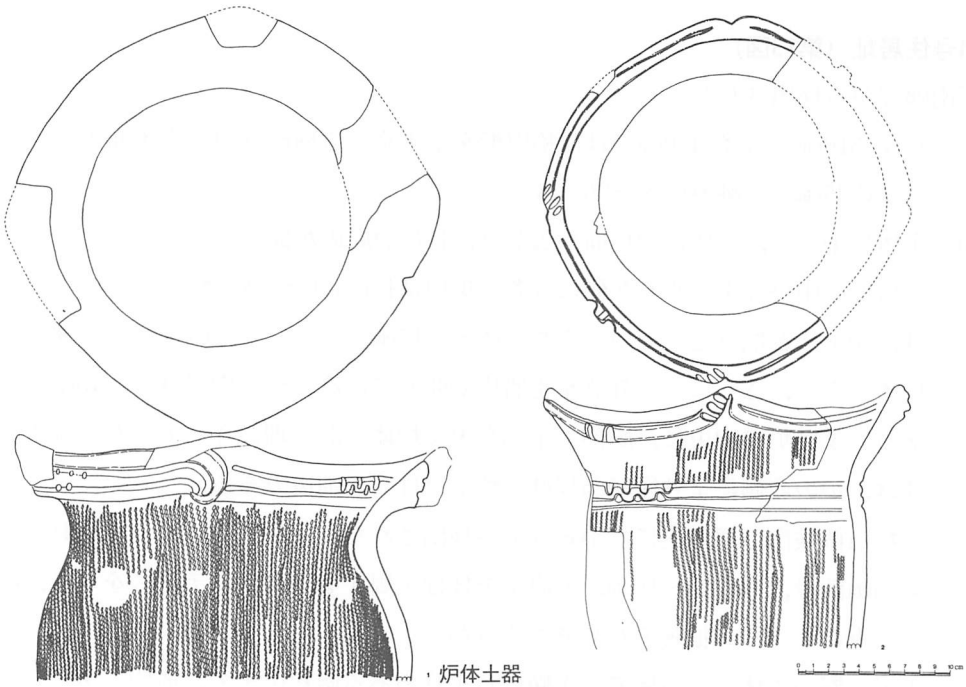
覆　土　１・２層が主体となる層で，１層はしまりのある暗褐色土で，遺物を多く含む２層もよくしまる土層で茶褐色を呈する。３～５層はローム粒子を多く含む黄褐色土。６層は２層に近似しているがやや暗い。７層は焼土・炭化物を含む。

時期は，勝坂期終末。遺物出土量は比較的少量であったが覆土上層部には阿玉台式期の土器がめだち該期の住居址の予測もされた。また住居の南東隅に柱穴等が検出されない部分があり，出入口部であったと思われる。

14号住居址出土土器（第14図）

１・２は炉中より検出された。１は炉体土器で胴下半部を欠いた状態で埋設されていた。口径25.5cm，現存高15.8cm，胴部最大径25.5cm。口縁部が大きく外反し，口頸部で一旦収約し胴部中央付近で最大径をもつ「壺形土器」と呼ばれているものである。口縁部は幅狭な文様体で４単位に区画され，それぞれに２本の平行する沈線が施され，その接点は渦巻文を用いている。また１区画をのぞき沈線上の中央部分に交互刺突文が描かれている。４単位区画の波状口縁となっているため，口縁部の平面形状は円形でなく，四角形を呈する。頸部下半から胴部にかけては撚糸文が施されている。胎土は，非常に緻密。焼成は良好である。色調は，外面口頸部で赤褐色だが胴部中央部は破熱のため黒褐色，内面で暗褐色を呈する。内面は口縁部から口頸部にかけてはヘラによる丁寧な調整がされている。

この土器の時期については，加曽利ＥⅠ式でも古手，さらには終末期勝坂式土器とみる意見もある。事実覆土中からは該期の破片も検出されているが，阿玉台式土器の検出も多い，そこで非在地形土器として大木式土器，とりわけ8*a*～8*b*式に関連を見い出せないもの



第14図　東台遺跡第10地点　14号住居址出土遺物１（$\frac{1}{5}$）

だろうか。「８ａ・８ｄ式の諸要素を兼ね備えた土器群として解釈し，大木８ａ式から86式に移行する過程において，南関東に波及することによって地方化したもの」(注)としたい。

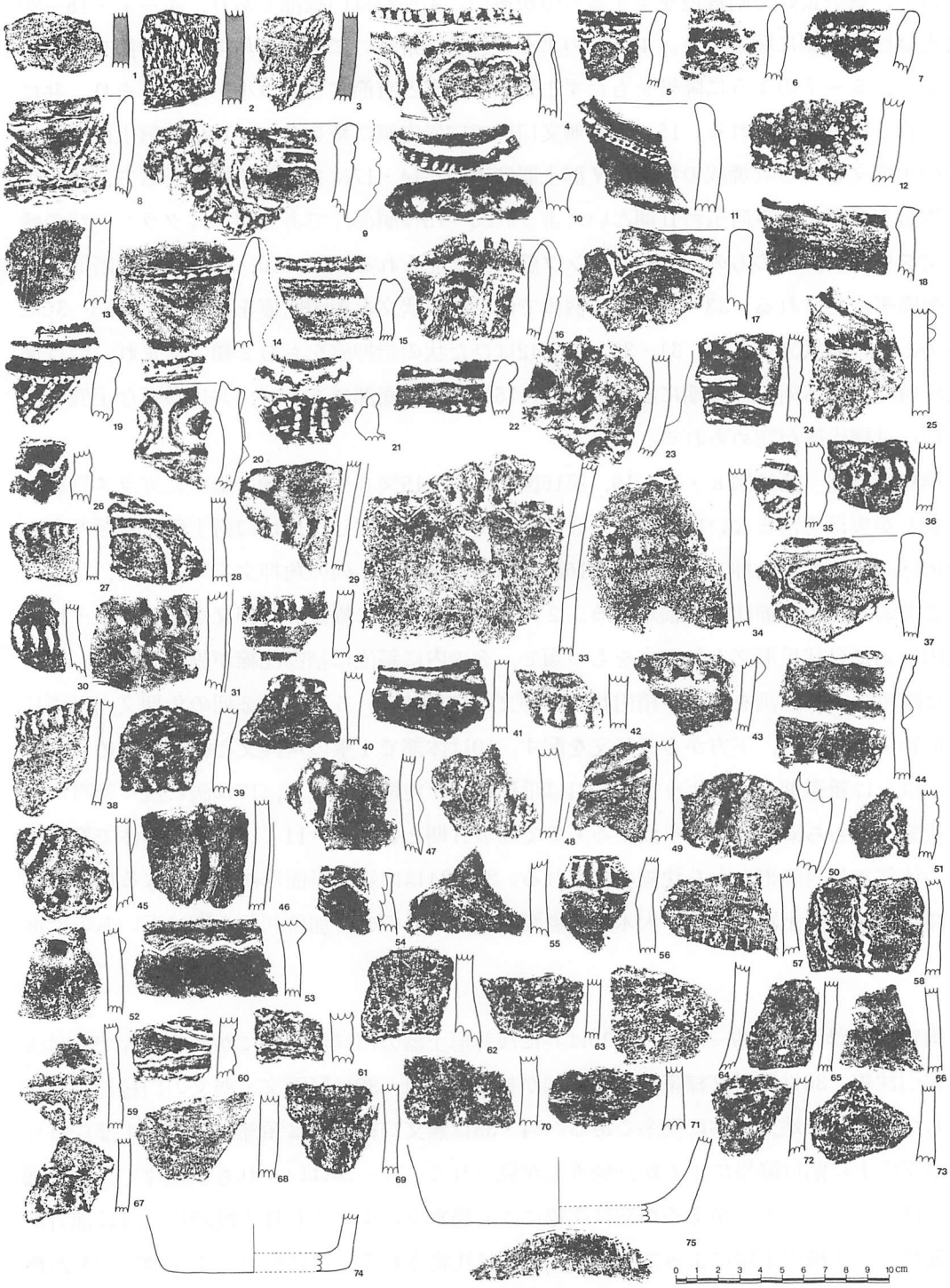
２は，１の炉体土器を囲むような形で破片で出土したものである。復元した土器は胴下半部を欠くもので，全体の$\frac{1}{2}$が検出された。口径21.5cm，波頂部までの現存高18cm，胴部最大径18.7cm，口縁部は１同様大きく外反するが，胴部はわずかにふくらみをもつがほぼ直線的である。口縁部が４単位区画の波状口縁で平面形は四角形を呈するという点は１と共通している。文様は口唇部直下に太い隆帯を，波頂部間に弧状にめぐらし刻み目を施している。頸部はすぼまり，３本の平行沈線を描き，その直上に交互刺突文による文様がみられる。口頸部から胴部にかけて地文に撚糸文が施されている。胎土，焼成ともに良好である。色調は，内外面とも暗褐色を呈し，内面はヘラによる丁寧な調整がされている。

14号住居址覆土中の遺物（第15～17図）

第Ⅱ・Ⅲ群土器（15図１～３）１は胎土に微細粒と植物繊維を多量に含み，表面には多方向の擦痕がある。２・３は胎土に微砂粒と若干の繊維を含み焼成は甘く裏面灰白色を呈する。２は無節の縄文を粗に押圧し，３の表面は磨滅するが僅かに縄文の痕跡が残る。

第Ⅴ群土器（15図51・52）ともに胎土に黒色光沢をもつ砂粒と雲母末を含む胴片で，無文地に縦方向の結節沈線が配される。Ⅴ群２類と思われる。

(1) 14号住居址出土遺物



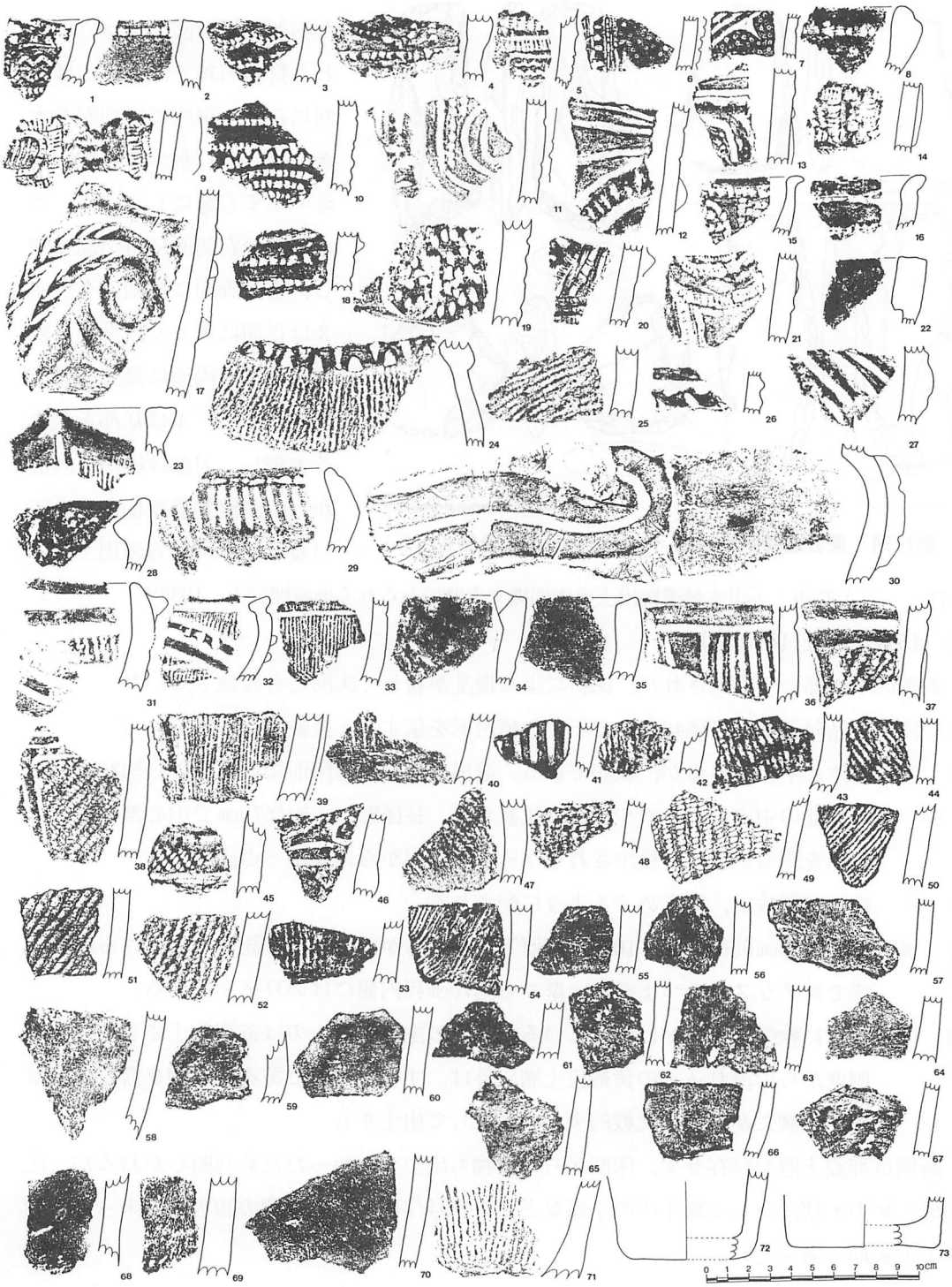
第15図　東台遺跡第10地点　14号住居址出土遺物２（$\frac{1}{3}$）

第Ⅵ群土器（15図４～75うち８・16・19除く。）　いずれも胎土に細砂粒と雲母末を多量に含み，焼成良好で暗褐色を呈するものが多い。４～22は口縁部であり，４～７・18～20などは口唇内側に稜をもつ。４・20のようにＸ状隆帯ぞいに１列の角押文や有節文をもつものと，５～７のように隆帯をもたず１列の角押文と有節文をもつ小形深鉢であり，共に阿玉台１ｂ期と見られる。15・18は無文口縁で口唇内側に稜をもつ。15の口唇上面には１列の角押文が見られ焼成の特徴はⅤ群土器に近い。14・17は２列の角押文をもち，胎土に金雲母を多量に含み阿玉台Ⅱ期といえよう。23～73は胴部片であるが29はクランク状の懸垂文をもつ１ｂ期のもの。46もクランク懸垂文と見られる。45～50，53～54には断面三角の微隆帯が見られる。33・34は同一個体で山形の波状文と指頭圧痕をめぐらす。53～56は角のとれた波状文である。31・32・41・42はひだ状の指押痕をもち２類に含まれ，57は櫛状圧痕文をもち阿玉台Ⅲ期に属する。74・75は深鉢の底部であるが，共に僅かな上底を示し75には網代痕が認められる。

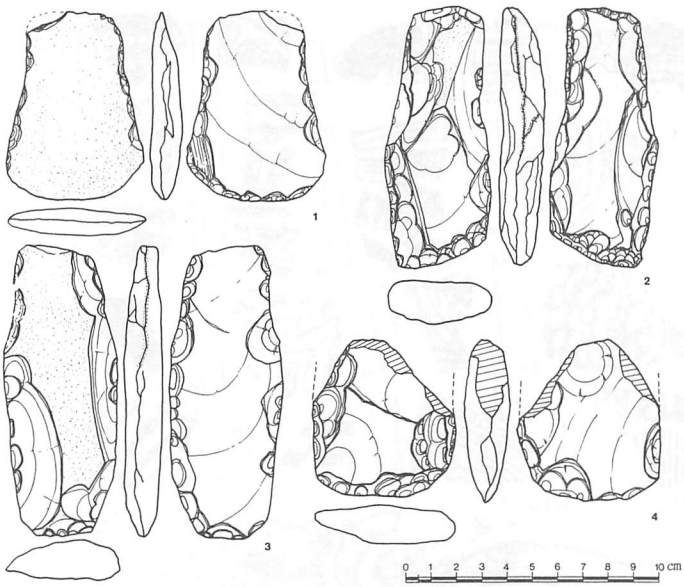
第Ⅶ群土器（第15図８・16・19，第16図１～24）15図８・16・19は胎土にガラス質砂粒を含むが雲母を含まない口縁部で，８は角押文をハ状に配し，16は口唇上面に刻目をもち矩形区画に２列の角押文がめぐる。16図１は楕円区画に１列の角押文をめぐらせ，区画文に２条の波状の結節沈線が横走する。２・16は口縁直下に幅狭な角押文を施す。９・14は楕円区画にＣ状爪形文と角押文をもつ類で，その内に斜位に結節沈線が施される。
15は隆帯による区画をもたず楕円状に角押文が施される。６・７は２列の角押文内区画に円形刺突文を施し，下方から三又文を配す。10は体部で４重の角押文と紐状文のめぐるもの。以上は新道期といえよう。20・21は爪形化した角押文をもち，17は渦に続く隆帯に綾杉状刻目をもち隅に三又文を配するもので勝坂Ⅱ期といえる。11・12は同一個体で筒形深鉢の体部で刻目隆帯をもち沈線多用される。23・24は口縁の平面形が方形となる地文撚糸の波状口縁壺形土器であり，大木系の影響を受けたもので，加曽利ＥⅠ期に近いものである。

第Ⅷ群土器（16図29～73）29～30は共に浅鉢形土器の口縁から胴にかかる破片で29は太い櫛引沈線，30は貼付文様帯に弧状沈線が特徴的。31・32は区画文・渦文の口縁部文様帯をもつ深鉢片で地文は共に撚糸である。34・35は無文口縁。37は頸部から胴上半部深鉢片で地文の上に貼付隆帯による蛇行懸垂文が見られる。38～70はいずれも胴細片で，地文縄文・撚糸・条線・無文があるが38は沈線による懸垂文によってＥⅡ古段階に，54は部分的に弧状をなす櫛引条線によって加曽利Ｅ Ⅲ期に比定される。71は底近くまで地文撚糸が施されるもので，72・73は無文底部であるが73はやや上げ底をなしほとんど直立する形の特

(1) 14号住居址出土遺物



第16図　東台遺跡第10地点　14号住居址出土遺物３（$\frac{1}{3}$）



第17図　東台遺跡第10地点　14号住居址出土遺物４（$\frac{1}{3}$）

徴がある。覆土中から出土した石器は第17図の４点でいづれも打製石斧である。１は正面に自然，裏面に打割面を大きく残し，打割の際の縁辺をそのまま刃縁にしている。２は基部の右側面に自然面を残し，正裏両面に打割面を残す。３は正面に大きく自然面を残し，刃部は両面に調整剝離を施してある。４は基部を大きく欠損し，刃部は細かい両面からの調整剝離が加えられている。柱穴内からの出土。

注）：三上徹也「下里本邑遺跡出土の中期縄文土器にみられる地域間交流」1982年

(2)　15号住居址（第18図）

調査区中央部より検出された。深耕による攪乱が著しく床面をも破壊していた。

規　模　長径54.5cm，短径49.5cmで不整な楕円形を呈する。長軸方位N―57°―E

床　面　全体に平坦であるが，軟弱である。遺構確認面から床面までの深さは約20cm前後。

炉　住居址の中央部よりやや北側に位置する。長径85cm，短径70cmで中心部の深さは15cmを測る。焼土が検出されなかった。炉内からは礫が一点出土。

柱　穴　総数14個検出，壁をめぐるように配される。

壁　溝　幅15～35cm前後，深さ10cm。壁直下をめぐるが西側では確認されず，さらに北西部ではテラスをもつように，壁から約70cm程内側にはいり込んでいる。

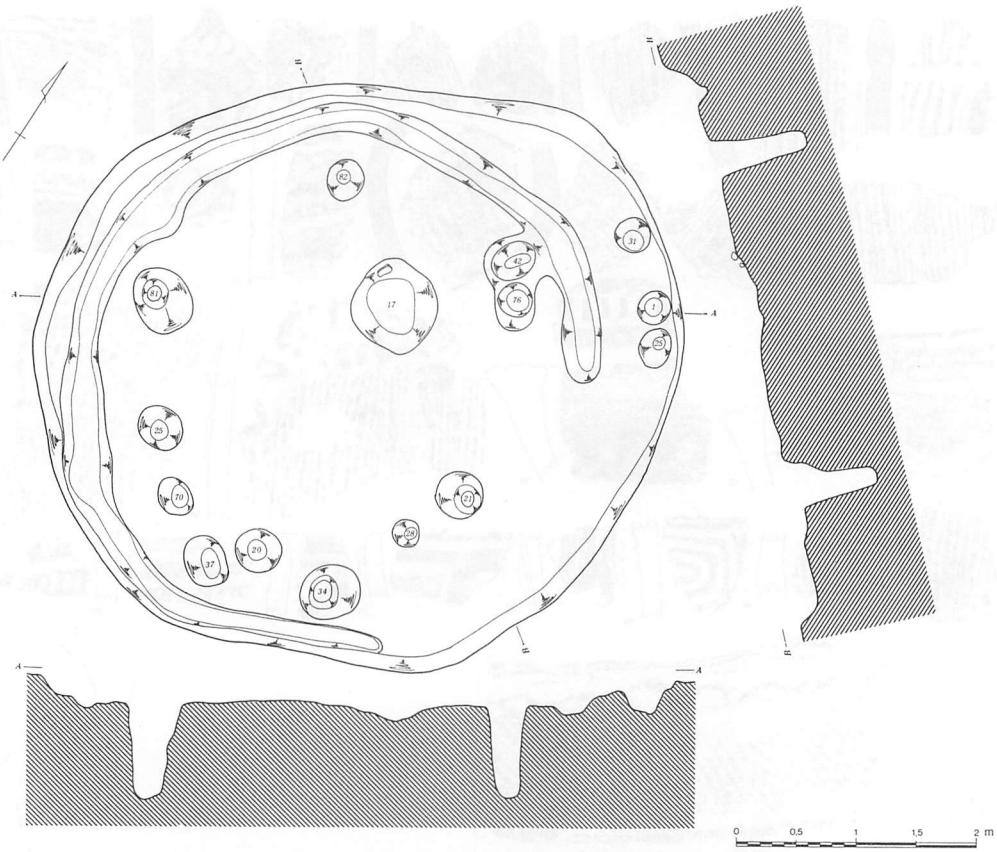
覆　土　全体に軟弱で深耕がはいっている。覆土の主体をなすのは茶褐色土でしまり良く，側壁からの流れ込みの黄褐色土層以外は，すべてそれである。遺物を含むのも茶褐色土層だが，量は比較的少なく散在して出土する。

時期は埋設土器が存在せず，床面からの遺物も出土しなかったため判断しかねるが，住居址や炉の形状，そして覆土中の土器などから14号住居址と同時期の勝坂最終末～加曽利ＥＩ古式期と考えたい。

15号住居址出土遺物（19・20図）

第Ｉ群土器（19図１・２）沈線文土器であり，１は口縁部片で幅 2.5cmの口唇部と体部

(2) 15 号 住 居 址



第18図　東台遺跡第10地点　15号住居址（$\frac{1}{80}$）

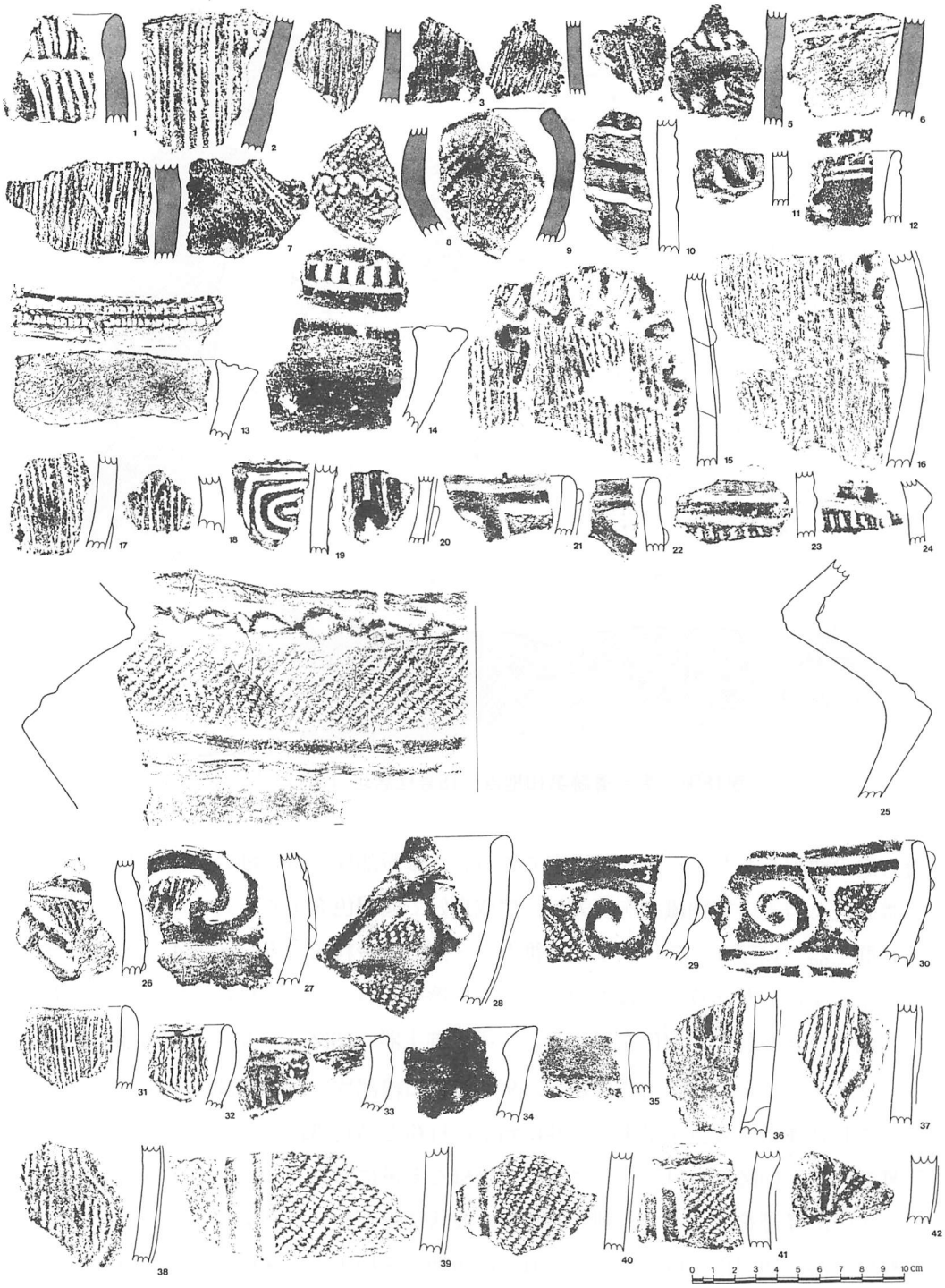
に縦方向の沈線をもち，三戸式に比定できる。2は胴部片で縦の細い沈線をもつ。共に胎土に微砂粒と若干の植物繊維を混入し，焼成良好で明褐色を呈する。

第II群土器（19図３～７）胎土に繊維と白・茶色微砂粒を含み，３・４・７は表裏に貝腹縁による条痕文があり，５は指頭圧痕，６は擦痕をもつ。焼成良好で３～５は赤褐色。６の内面は焼きが甘く灰白色を呈する。　第III群土器（19図８・９）８は頸部片で，頸部にループ文をめぐらせた関山式に属し，９は波状口縁部片で，突出部のみ無文で，体部地文は共にＬＲ縄文で褐色を呈する。共に胎土に貝粉と植物繊維を含む。

第VI群土器（19図10・11）ともに胎土に雲母を多量に含み，10は指頭圧痕文が，11には断面三角の微隆帯をはさんで，刺突痕を残す波状沈線が施文される。

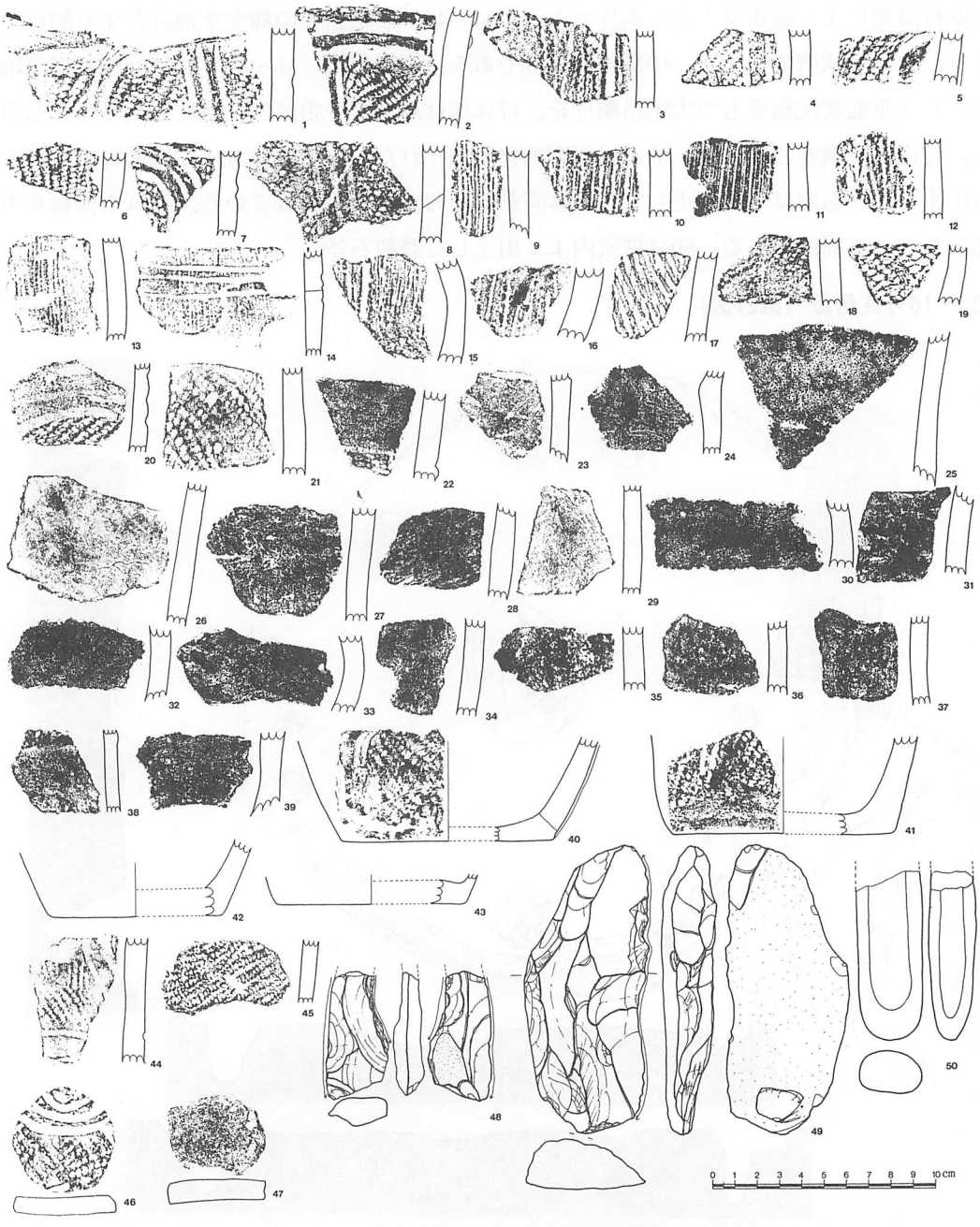
第VII群土器（19図12～14）12は口唇直下に角押文を施す小形深鉢で，13は口唇上面に２条の角押文を施し，14は上面に２条の沈線間に櫛状施文をもつ口縁片で焼成良好である。

第VIII群併行土器（19図15～20）いずれも曽利系土器であり，15・16は同一個体で貼付け



第19図　東台遺跡第10地点　15号住居址出土遺物１（$\frac{1}{3}$）

(2) 15号住居址出土遺物

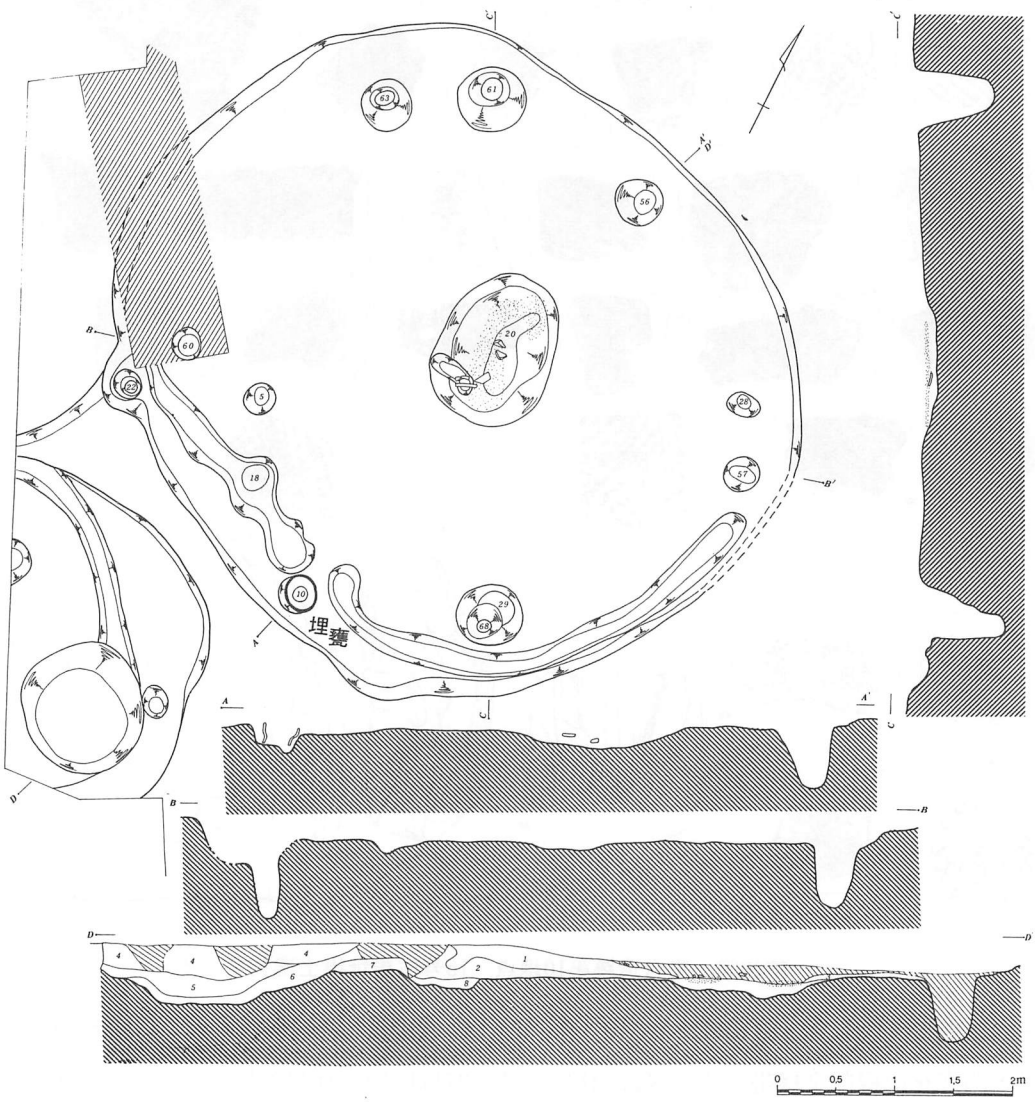


第20図　東台遺跡第10地点　15号住居址出土遺物２（$\frac{1}{3}$）

で蛇行懸垂文を作る。　第Ⅷ群土器（第19図21～24）（第20図１―43）21・22・28～30は区画文・渦文を口縁部文様帯とする深鉢口縁片。23～27は口縁文様帯部片である。25は胴最大径44cmの浅鉢で口唇部及び底部欠く。頸部は隆帯を交互刺突し胴上半にはＬＲ

縄文を施し加曽利ＥⅠ期のもの。41～43は地文撚糸の素口縁中形深鉢。50～53は地文縄文に貼付隆帯による懸垂文をもつ胴片である。44・45は回転施文の縄文を地文とする胴片であり，44は弧状磨消をもち，中期末の１群である。土製円板（46・47）46は回転縄文を地文とし３重弧状沈線をもつ大木系胴片を，47は深鉢形土器の頸部無文帯片を利用したもので，長辺は打調整であるが，他は縁辺磨調整の施されたもので，ともに住居内覆土上層から出土した。石器は３点出土した。48は両側縁に刃部を作り出している。49は右側縁を刃部としている削器である。50は柱穴内より出土した磨製石斧。

3.　16号住居址（第21図）



第21図　東台遺跡第10地点　16・18号住居址（$\frac{1}{60}$）

(3) 16 号 住 居 址

調査区中央部よりやや北側で検出された。

規　模　長径570cm，短径510cmのほぼ楕円形を呈する。西側には深耕による攪乱が，また北側の立ち上がりも調査以前に重機により破壊されている。長軸N—64°—W

床　面　全体に平坦で，硬化面もひろがっている。南東部に正位の胴上半の埋甕をもつ。

炉　住居址のほぼ中央部に位置し，規模は長径130cm，短径100cm，中心部での深さは約15cm。炉中から土器片6と礫2ケが出土。南側に深さ15cmの小ピットが検出された。また焼土の範囲は帯状にひろがり炉の中心部分を覆っている。厚さ5cm。

柱　穴　総数7本検出。小ピット，壁溝内ピットが3本検出されている。

壁　溝　幅25cm前後，深さ5～10cmで南西から南東部にのみ検出され全周しない。埋甕の直前で壁溝は立ち上がっている。

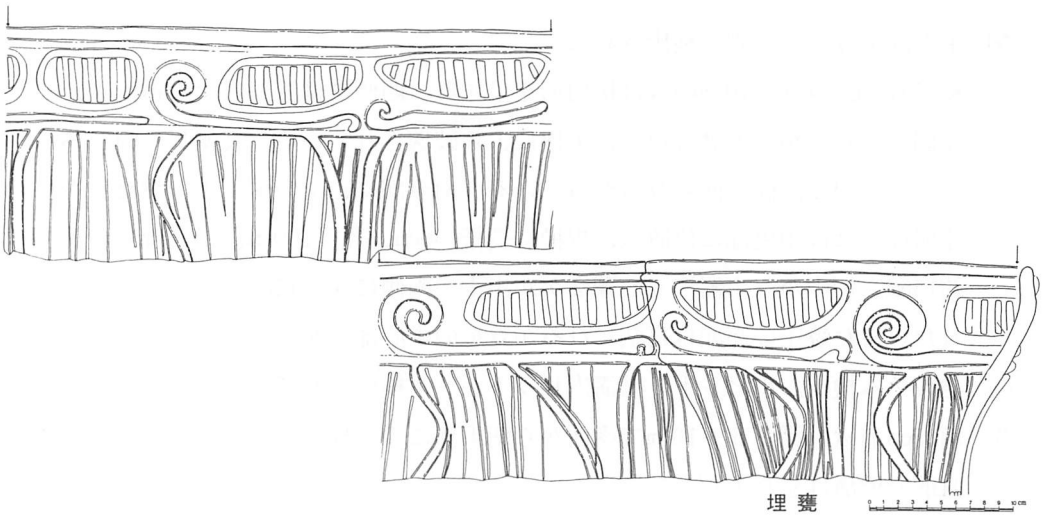
覆　土　住居址北側半分は，攪乱のため覆土は薄い。2・3層が主体層でこの地域特有のしまり良い暗褐色土層で2層に遺物を含む。4層は焼土・炭化物を含む。

時期は埋設土器から加曽利ＥＩ式でも最終末に属すると考えられる。埋甕と炉を結ぶ延長線は長軸ラインとほぼ直交する。埋甕はやや主体部(炉)に向かって斜位になっている。

16号住居址出土土器（第22図）

第22図は，16号住居址の南壁部直下より検出された胴下半部を欠損する埋設土器である。土器は住居内側に傾斜するように出土した。埋設していたピットは北側では土器との隙間はほとんどなかったが，南側で斜位になっていた部分だけ土器との間隔は多少あった。土器中の覆土は比較的軟質の褐色土で遺物はなかった。埋設土器と掘り込み間はローム粒子を多く含む軟かい暗褐色土が充填している。

口径は26.5cm，現在高17cmの深鉢形土器である。口縁部文様帯は3単位からなる。隆帯による渦巻文と楕円区画文と半月状の枠状区画文が交互に配され，枠状区画文内には縦沈線が充填される。口縁部文様帯から2本1対の直線状の隆帯文と1本の蛇行する隆帯文が原則として口縁部文様帯の渦巻文下とその中間に懸垂されているが1単位のみその原則からはずれているため懸垂文は11本を数える。胴部の地文には隆帯の貼付後に櫛歯状の施文具で縦位に条線を描いている。胎土には小石を多く含んでいるが焼成は良好である。内面一部に剝落が見られる。色調は全体褐色を呈するが，胴部の一部は黒褐色を呈する。内面は明るい赤褐色である。また内面,特に口頸部にはヘラによる調整が丁寧に施されている。胴部外面の黒褐色の部分と一部口唇部付着の黒色のスス，及び内面の二次焼成による器壁の剝落は，埋甕として埋設される前段に煮沸具の炉体土器として使用された可能性があると思われる。時期は口縁部文様帯が渦巻文と区画文を持ち，横帯構成が中心の土器で加曽利ＥＩ式でも終末の土器とみなせよう。



第22図　東台遺跡第10地点　16号住居址出土遺物１（$\frac{1}{5}$）

覆土中の遺物（第23・24図）

第Ⅱ群土器（23図１～11）いずれも胎土に植物繊維を含むが，２～４は特に繊維が多い。10・11は胎土に石英粒をかなり含み９地点出土の押形文土器の胎土に近い。１は表面縦・裏面横方向の条痕をもつ口縁部片で，口唇端は内から外へ削がれており子母口式の特徴をもつ。２・３は表裏条痕の胴片で赤褐色を呈し，４・５は表面のみ条痕文をもつ胴片である。６～10は擦痕の類で，11は無文口縁部で焼成よく赤褐色を呈する。

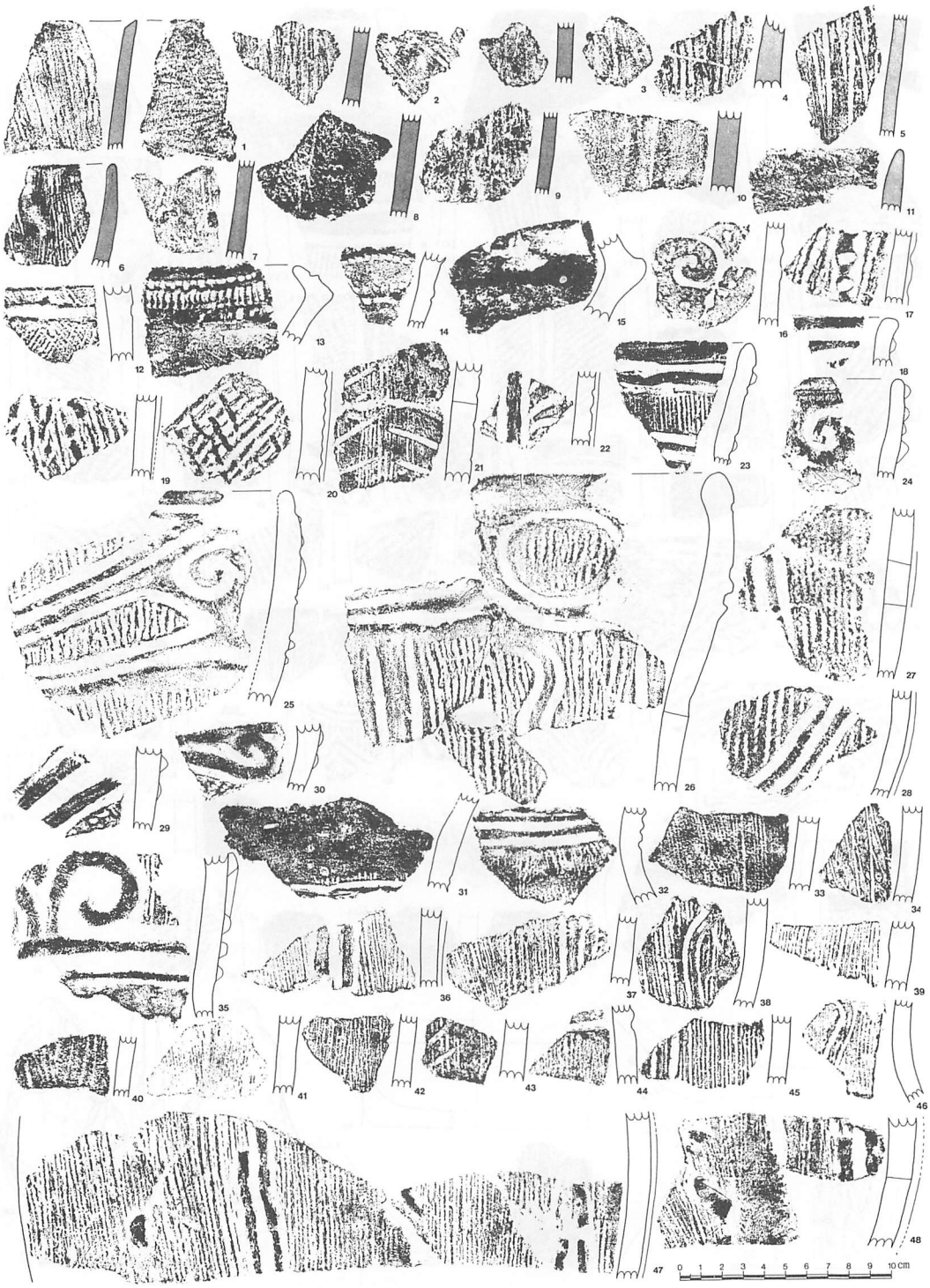
第Ⅴ群土器（23図12）胎土に石英微砂粒を多く含む焼成良好のもので，平行条線が格子状にひかれた厚手の胴片で，五領ケ台式に近似する。

第Ⅶ群土器（23図13～17）13は通常の角押文と幅広の角押文をめぐらせた浅鉢の口縁部片で，14は小形角押文をもつ口縁直下の小片。15は紐状隆帯をもつ文様帯下半部片。16は胴部片で，渦文をもち竹管による斜位の刺突文を施す。17は貼付隆帯に刻目を施す。

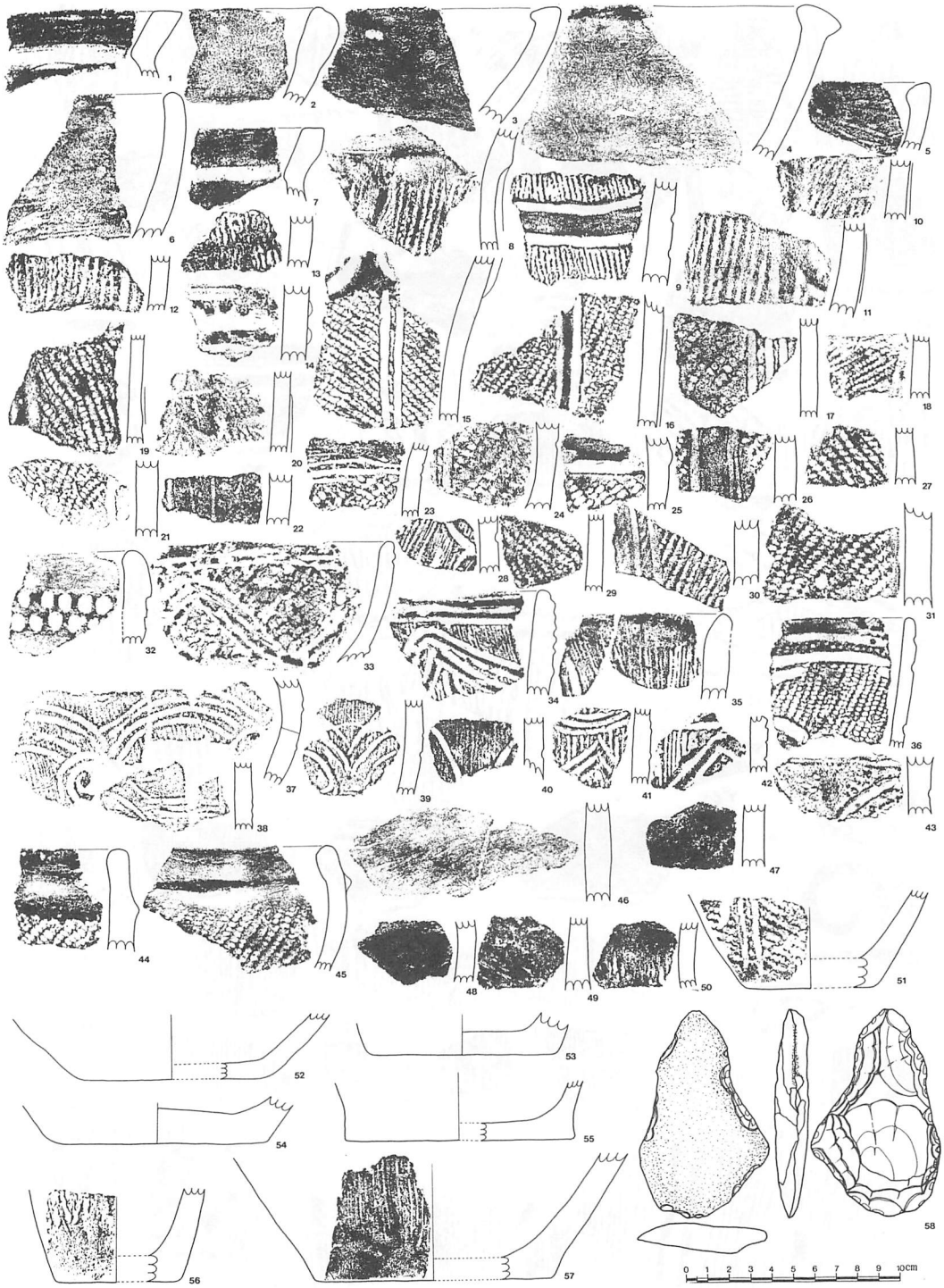
第Ⅷ群併行土器（23図18～22）曽利系の土器で，19は円頭からの蛇行する貼付垂下文をもつ。20は頸部片で紐状貼付による斜格子文を作る。21・22と共に沈線による綾杉文をもつ胴片。

第Ⅷ群土器（第23図23～48）（第24図１～51）23～26は区画文・渦文をもつ口縁部片で，27～30は同口縁部文様帯片である。27・28は地文縄文で他は撚糸を地文とする。22・25は大形深鉢であり，頸部に続く部分をもつ25は頸部無文帯を持たない。炉中から出土した26も頸部無文帯を持たない類で，２条の沈線間を幅狭く磨消した直下・蛇行懸垂文６組をもつ中形深鉢である。30は口唇部を欠くが頸部無文帯をもつ類で，31は頸部無文帯から胴上半の破片である。32は地文条線の胴部片であり，39・40は沈線による懸垂文で，36・47

(3) 16号住居址出土遺物



第23図　東台遺跡第10地点　16号住居址出土遺物２（$\frac{1}{3}$）〈No.26炉出土〉



第24図　東台遺跡第10地点　16号住居址出土遺物３（$\frac{1}{3}$）

は隆帯貼付による懸垂文であり，47は胴径29cmで２本１組の隆帯と蛇行懸垂文が四単位配される。以上は加曽利ＥＩ式でも新式に属する。24図１～７は無文口縁部であり，８～13は地文撚糸の胴部片で，14は頸部無文帯から胴上半部片で隆帯貼付の懸垂文をもち16も同類である。15～31は地文縄文の胴部片で懸垂文には隆帯貼付の類・沈線で表現した類・沈線間を幅狭く磨消した類があり加曽利ＥＩ期からＥII期のものである。32は口唇直下に２段の列点文をもつやや大形深鉢片である。33～43は連弧文を有する土器群で，地文条線のものが目立つが，地文撚糸・縄文もみられる。37・38は同一個体で四重弧の下端に渦状のものが付加された大木系の類である。胎土に茶・白色砂粒を多く含んでいる。44・45は口縁に無文帯をもつ中形深鉢の口縁部である。46～50は出土例の多い無文胴部細片の代表である。51～57は底部片で52の浅鉢の他は深鉢底部片である。51は地文縄文に沈線による懸垂文が底近くまで施されたもので，55は焼成甘く一度直立してから胴弧に移る加曽利Ｅ末のものである。56は地文撚糸，57は地文条線のやや大形深鉢底（底径11cm）で，いずれも加曽利ＥＩ新～ＥII期のものであるが，底に網代・葉痕などを持たない。石器は覆土上層部より１点出土している。58は正面に自然面，裏面に打割面を大きく残す。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用し，磨耗痕は正裏両面の刃縁にみられる。

(4) 17号住居址（第25・26図）

調査区北側より検出された。

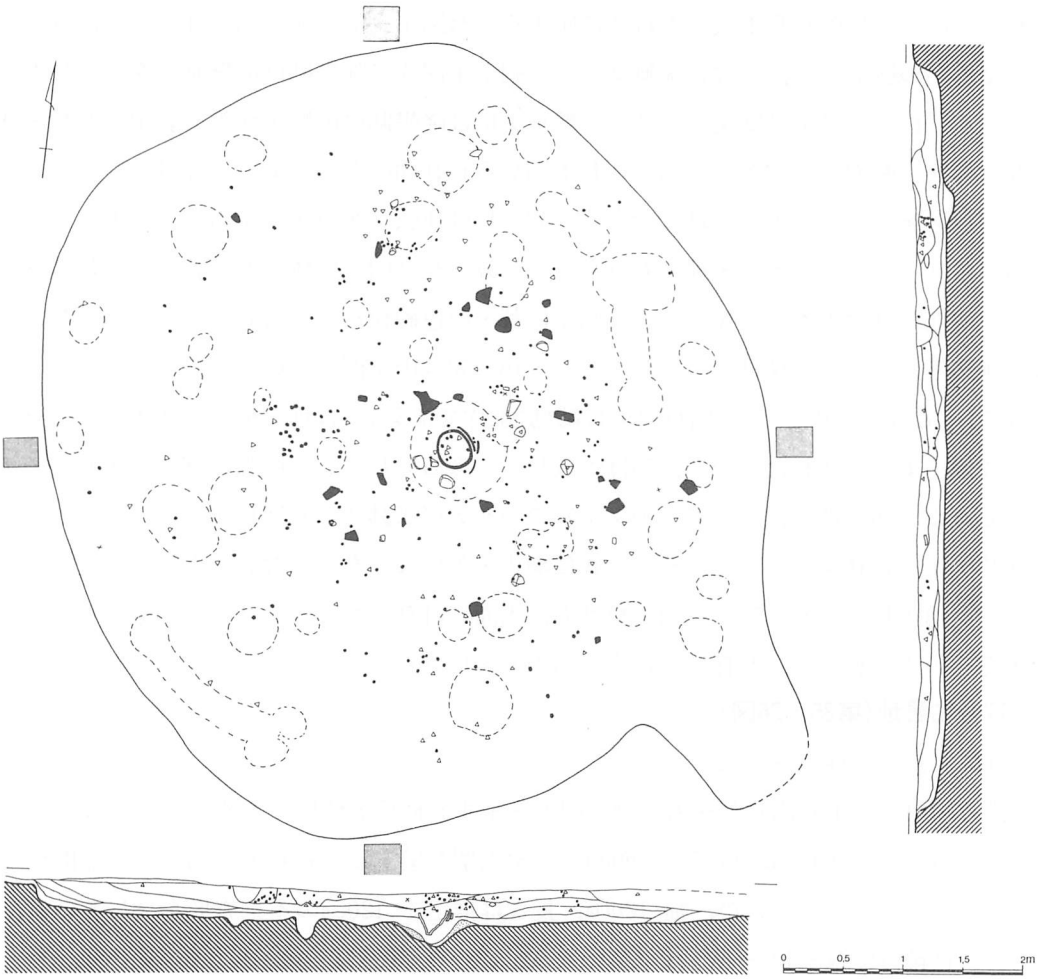
規　模　南東部に張り出し部をもつほぼ円形を呈する柄鏡形住居である。主体となる部分の長径は 640cm，短径で 590cmとやや大型を呈する。張り出し部は，一部攪乱のため明確ではないが，幅 120cm，長さは推定で 120cmの不正方形をなしている。長軸方位Ｎ―43°―Ｗ。

床　面　一部で硬化面が認められるが，全体に軟弱で緩やかに皿状に掘り込んでいる。

炉　住居址中央よりやや張り出し部寄りに位置し，径85cmの円形を呈する。深さは床面から25cmで，断面はすり鉢状である。炉内には，径30cm，高さ30cmの口縁部を欠く土器が埋置され，床面より土器上部が５cm程突出した状態で検出された。また，炉体土器の東脇には数片の土器を約$\frac{1}{3}$周めぐらせている。炉内からはこの他に礫が１ケ確認された。炉の底面は長径50cm，短径45cmの範囲で非常に良く焼けていた。深さ28cmのピットが１本炉に穿たれている。

ピット　大小あわせて総数40本のピットを検出した。主柱穴と思われるものは８本あり，その主柱穴の内側に小ピットが炉を囲むように存在する。住居の東側と西側には壁溝が浅く掘られ（５cm前後），西側には小ピットが検出された。

覆　土　主体をなすのはしまり良い暗褐色土で，遺物も該層の上層を中心に出土。柱穴の



第25図　東台遺跡第10地点　17号住居址遺物出土状態（$\frac{1}{60}$）

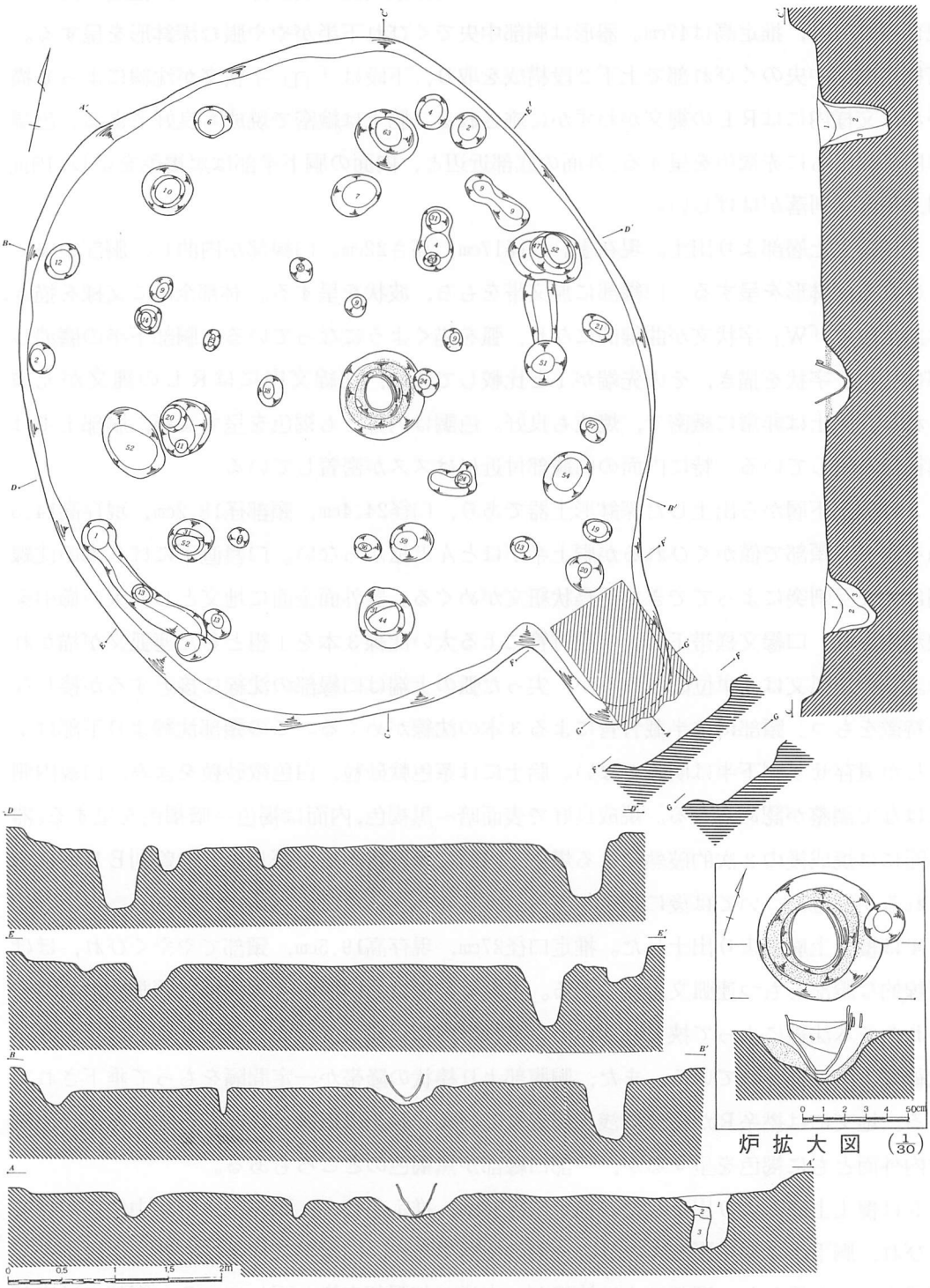
覆土は１層が褐色土でローム粒子を多く含む。２層は暗褐色土層でしまり良い。３層は側壁からの流れ込みで黄褐色を呈する。ピット１は２層のロームブロック３層のソフトロームをつめこみ，１層部分に挿入されていた柱を支える構造をとっている。

時期は，炉体土器から縄文時代中期終末，加曽利ＥⅣ式期と思われる。張り出し部をもつ住居址検出は町内では２軒目であるが，柄部に一部攪乱があり完全な形態をとどめていなかった。土器の出土総量は 813点，石器が２点出土した。

17号住居址出土土器（第27図）

本住居址より出土した土器のうち，復元できたものは５個体である。

(4) 17号住居址



第26図　東台遺跡第10地点　17号住居址 (1/60)

第27図１は，炉体土器で口頸部を欠損する。現存最大径は胴上部で35cm，推定口径42cm。現存高は37cm，推定高は47cm。器形は胴部中央でくびれ下半がやや脹む深鉢形を呈する。文様が胴部中央のくびれ部で上下２段構成を取り，下段は「∩」字状文が沈線によって描かれ，文様内にはＲＬの縄文がわずかに施される。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。外面の底部近辺と，内面の胴下半部は黒褐色を呈し，内面胴上半部は剝落がはげしい。

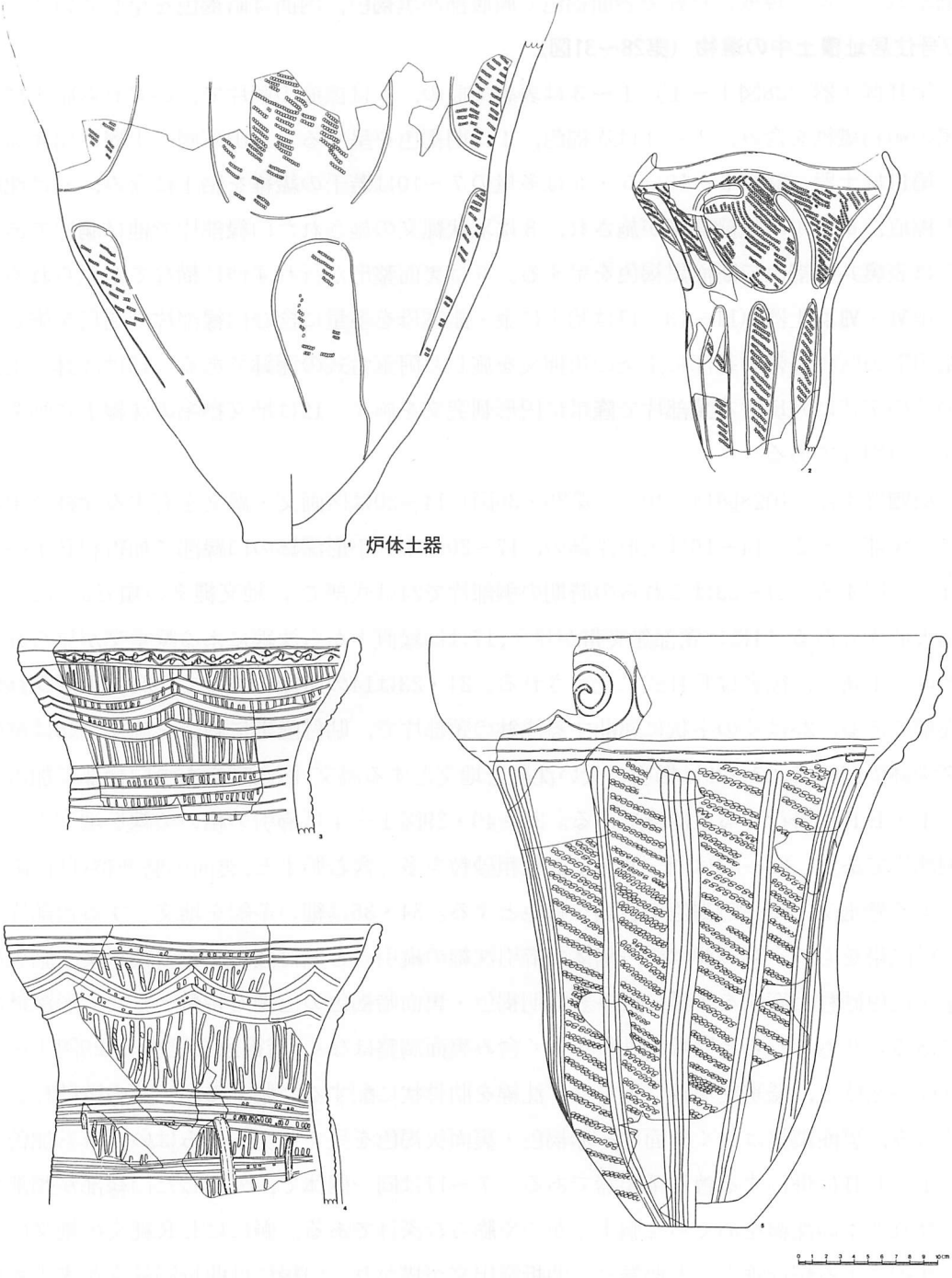
２は覆土上層部より出土。現在½。口径17cm，高さ22cm。口縁部が内曲し，胴部中央でくびれる深鉢形を呈する。口縁部に無文帯をもち，波状を呈する。体部全体に文様を描き，体部上段は「W」字状文が曲線的になり，弧を描くようになっている。胴部下半の磨消し部は「∩」字状を描き，その先端が１と比較して鋭い，沈線文内にはＲＬの縄文が充塡される。胎土は非常に緻密で，焼成も良好。色調は内外とも褐色を呈するが，胴部上半は黒褐色を呈している。特に内面の口縁部付近にはススが密着している。

３は覆土下層から出土した深鉢形土器であり，口径24.4cm，頸部径18.2cm，現存高14.3cmを測る。頸部で僅かくびれるが胴上半がほとんど拡がらない。口唇直下には２本の沈線間に，交互刺突によってできた千鳥状紐文がめぐる。器外面全面に地文として太い櫛引条線が施され，口縁文様帯下に，半截竹管による太い沈線３本を１組とした連弧文が描かれる。この連弧文は６単位配されるが，尖った弧の上端は口縁部の沈線に接近するが接しない特徴をもつ。頸部には半截竹管による３本の沈線がめぐる。この頸部沈線より下部は１cmしか遺存せず胴下半は明瞭でない。胎土には茶色軟砂粒，白色微砂粒を含み，口縁内側にはなで調整が認められる。焼成良好で表面暗～黒褐色，内面は褐色～暗褐色を呈する。器外面には焼成後の２次的破熱による煤化・内面には苔状剝離が著しい。加曽利ＥII期に含まれるが細分については後に予定する。

４は覆土上層部より出土した。推定口径27cm，現存高19.5cm，頸部でややくびれ，ほぼ直線的な胴部をもつ連弧文土器である。主たる文様は，口縁の４本沈線と胴腹部にめぐらされた６本沈線によって挟まれている。文様帯内には連弧文が６単位配されており，３本沈線によって描かれている。また，胴腹部より棒状の隆帯が一定間隔をもって垂下されている。地文には撚糸Ｒが縦位に浅く施されている。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は内外面ともに褐色を呈するが，一部口縁部が黒褐色のところもある。

５は覆土上層部より出土した。推定口径38cm，推定高43cm，頸部から胴部中位にかけてくびれ，胴下半でやや脹むキャリパー形の土器である。口縁部文様帯は渦巻文と区画文で構成されると思われ，頸部に太い沈線が一本描かれ胴部文様と画している。胴部には内部の磨り消された２本沈線と３本沈線の２種類の懸垂文が一定間隔で施文されている。地文

(4) 17号住居址出土遺物



第27図　東台遺跡第10地点　17号住居址出土遺物１（$\frac{1}{5}$）

には３段の縄ＲＬＲが全面に回転施文されている。胎土には小石，砂粒を含み内面はよく磨かれている。焼成は良好で表面褐色で胴腹部が黒褐色，内面は暗褐色を呈している。

17号住居址覆土中の遺物（第28～31図）

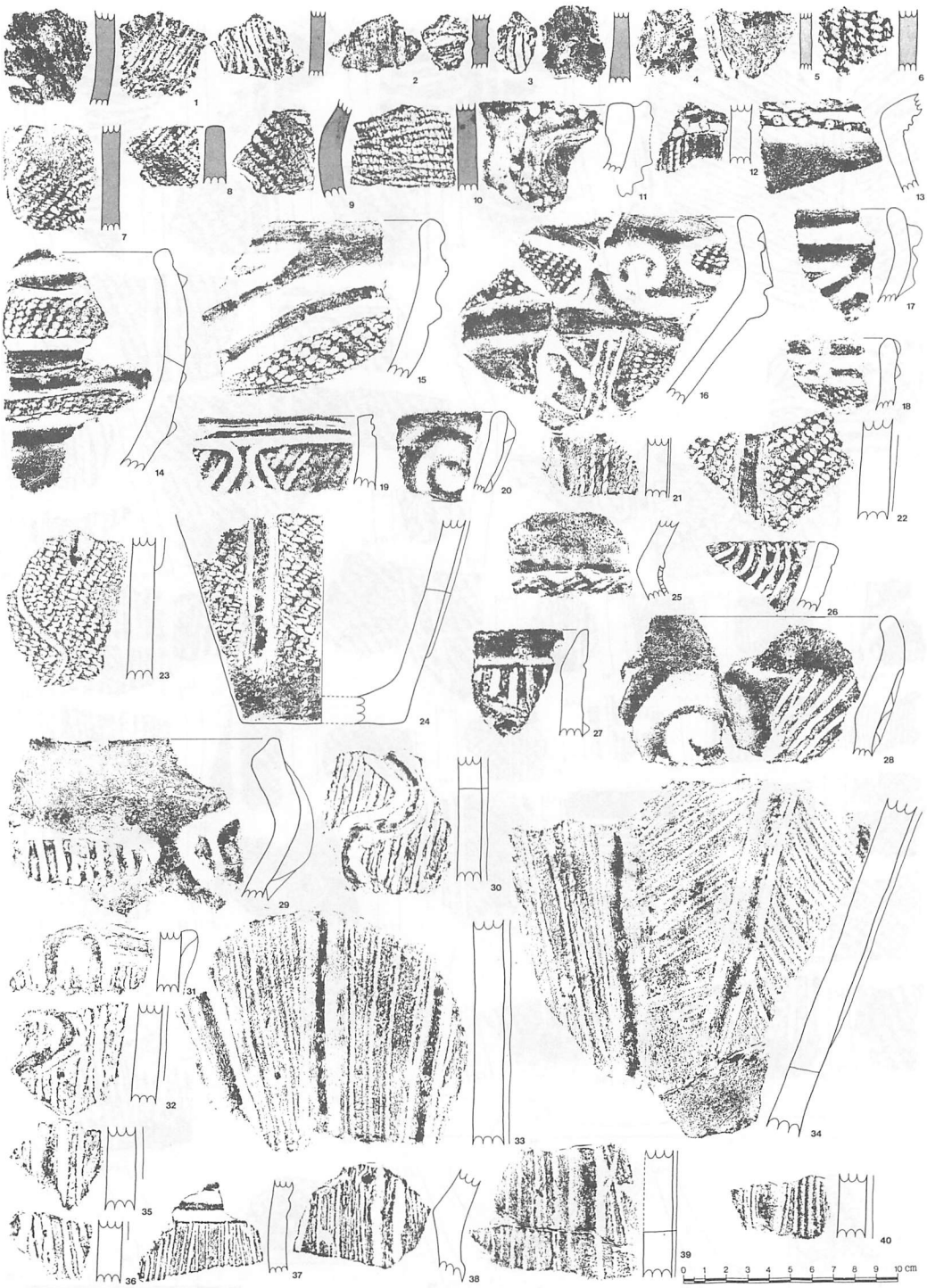
第Ⅱ群土器（28図１～４）１～３は表裏条痕の，４は擦痕の胴片で，いずれも胎土に多量の植物繊維を含み，１～３は赤褐色，４は明褐色を呈する。茅山下層～上層に属する。

第Ⅲ群土器（28図５～10）５・６は多量の７～10は若干の繊維を胎土に含み，５は沈線と擦痕，６～10は無節縄文が施され，８は羽状縄文の施された口縁部片で他は胴片である。７は表裏共明褐色で断面黒褐色を呈する。６は裏面整形が行れず他は横なでが見られる。

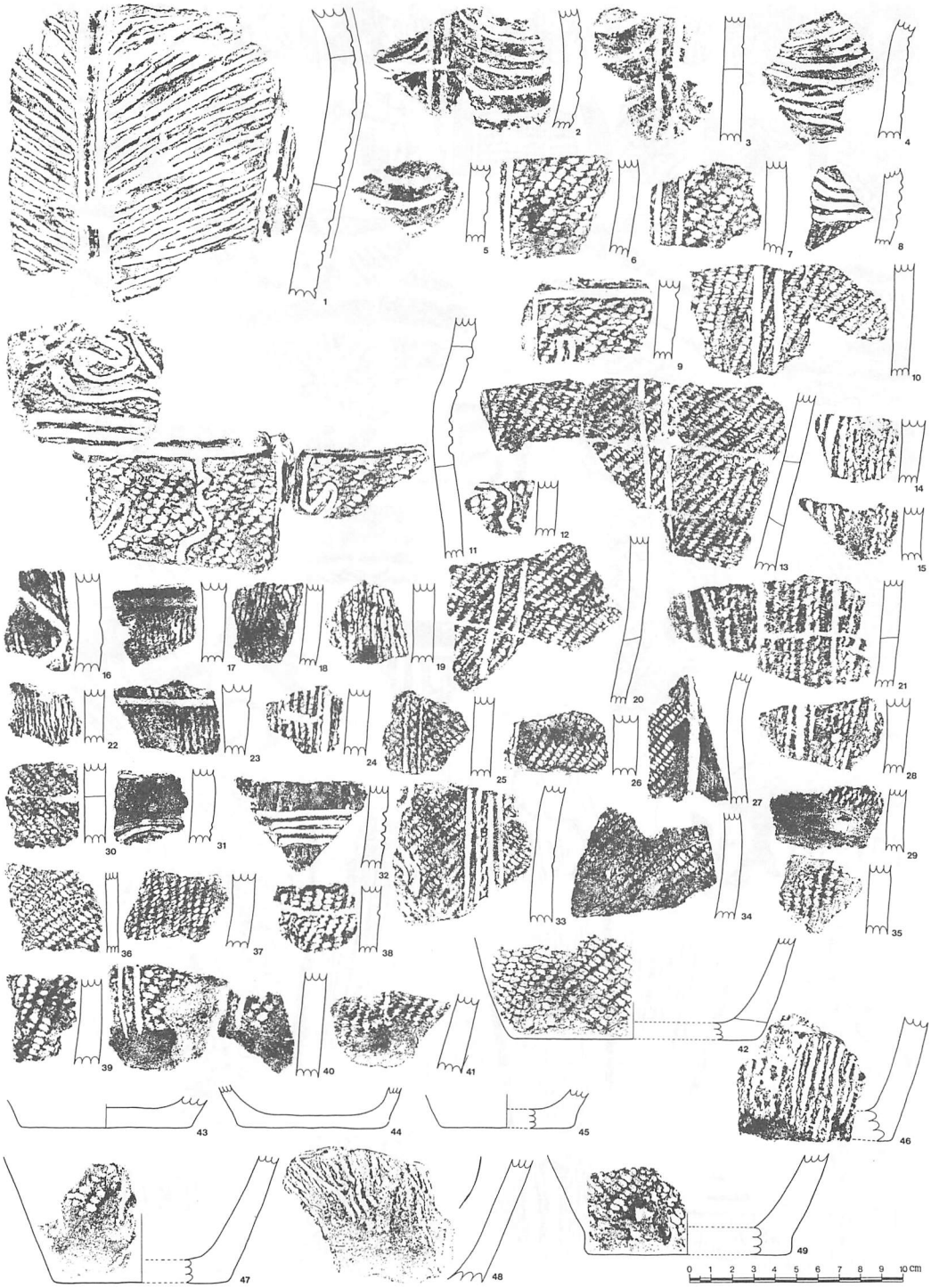
第Ⅵ・Ⅶ群土器（11～13）11は胎土に金・銀雲母を多量に含む口縁部片で刻目を施した楕円形の区画隆帯の基部に１条の角押文を施した阿玉台式の深鉢である。13は浅鉢形土器のくの字状に外反する頸部片で隆帯に円形刺突文を施す。12は地文撚糸の沈線上に刺突文をもつ胴片である。

第Ⅷ群土器（第28図14～40）（第29・30図）14～20は区画文・渦文を有する深鉢形土器の口縁部である。14～16は大形深鉢の，17～20は中・小形深鉢の口縁部で加曽利ＥⅠ～ＥⅡ式に属する。21～23はこれらの時期の胴部片で24は底部で，地文縄文の類である。
稍大形片である 14には頸部無文帯が見え,17は口縁直下から沈線による懸垂文が見られ前者はＥⅠ新に，後者はＥⅡ式に比定される。21・23は14の時期のもので，24は大形深鉢の底部である。25はくの字状に屈曲する浅鉢の頸部片で，貼付隆帯に刺突を施す。26は重弧文深鉢の口縁で,27～29は櫛引の太い沈線を地文とする渦文･区画文をもつ口縁部で加曽利ＥⅠ・ＥⅡに併行する土器群である。29～40・29図１～４は櫛引の粗い条線を地文とする胴部片である。29～33は同一個体で白色粗砂粒を多く含む胎土と,裏面の磨調整･貼付隆帯による懸垂文，赤～暗褐色の色調を特色とする。34・35は細い条線を地文とする頚部片で貼付隆帯をもつ。36～38は同一個体で櫛引沈線の縦引きと貼付隆帯からの綾杉文・胎土に茶・白色砂粒と石粉を多量に含み表面明褐色・裏面暗褐色の色調を特徴とした大形深鉢片である。39もこれらと同類で砂粒を多く含み裏面調整はなく,暗褐色を呈する。29図１～３は同一個体で，懸垂文を軸に弧をなす沈線を肋骨状に配する。胎土に白・茶の微砂粒を多く含み，裏面調整はなく外面明～赤褐色・裏面灰褐色を呈する。これらはいずれも加曽利ＥⅠ・ＥⅡに併行する曽利系土器である。７～11は同一個体で，外反した口縁部が頚部でくびれ３本の沈線をめぐらせ胴上半がやや膨らむ深鉢である。胴にはＬＲ縄文の地文の上に沈線による蛇行垂下文と渦巻文・曲折突出文が描かれ，口縁には曲折渦巻文が表出される。胎土に微砂粉・茶色砂粒を含み裏面調整が行われた　大木８ｂ系の土器である。12～14は同一個体で地文ＬＲ縄文に２本の沈線からなる垂下文を作る胴片である。15～18は同

(4) 17号住居址出土遺物

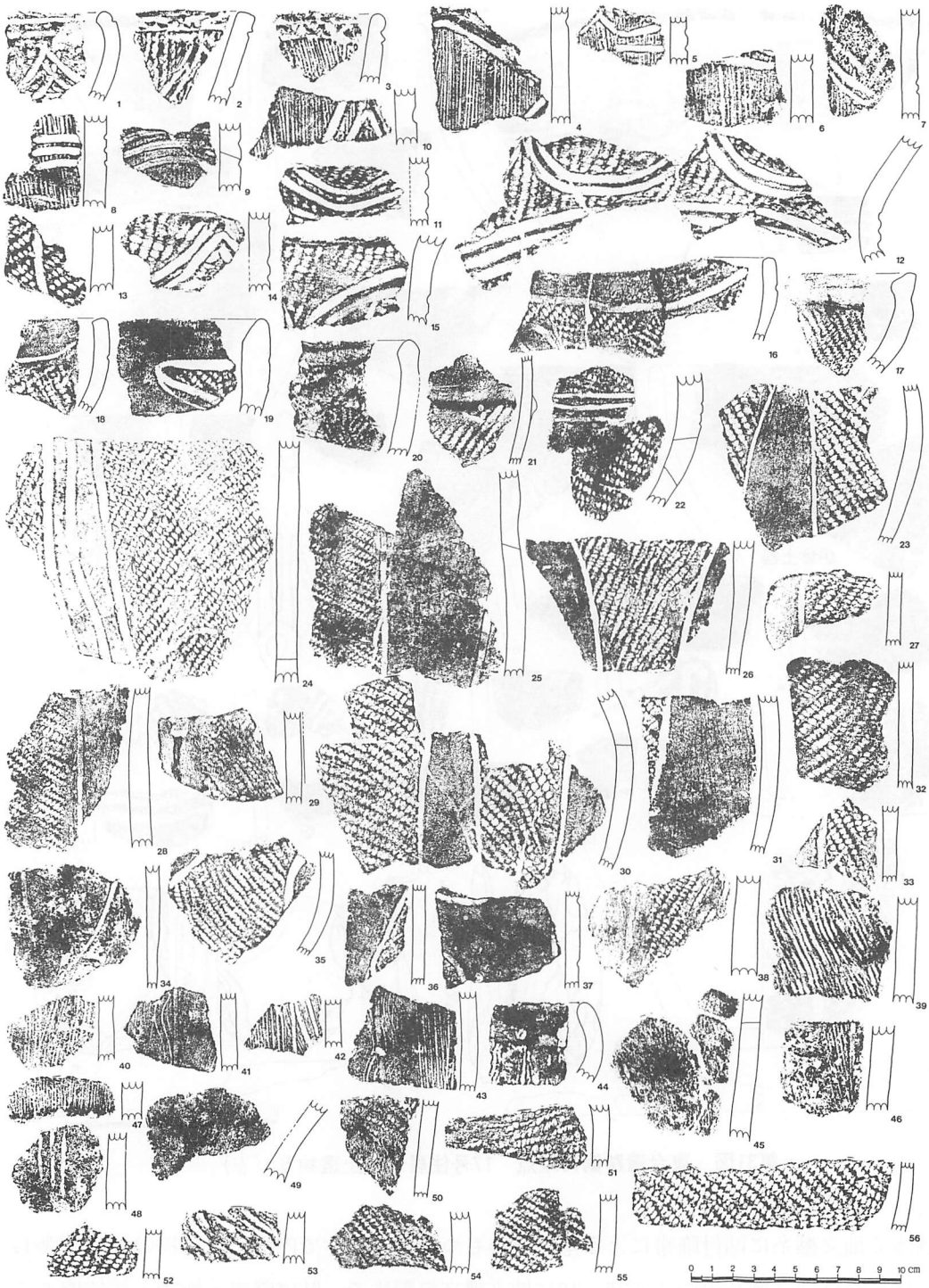


第28図　東台遺跡第10地点　17号住居址出土遺物２（$\frac{1}{3}$）

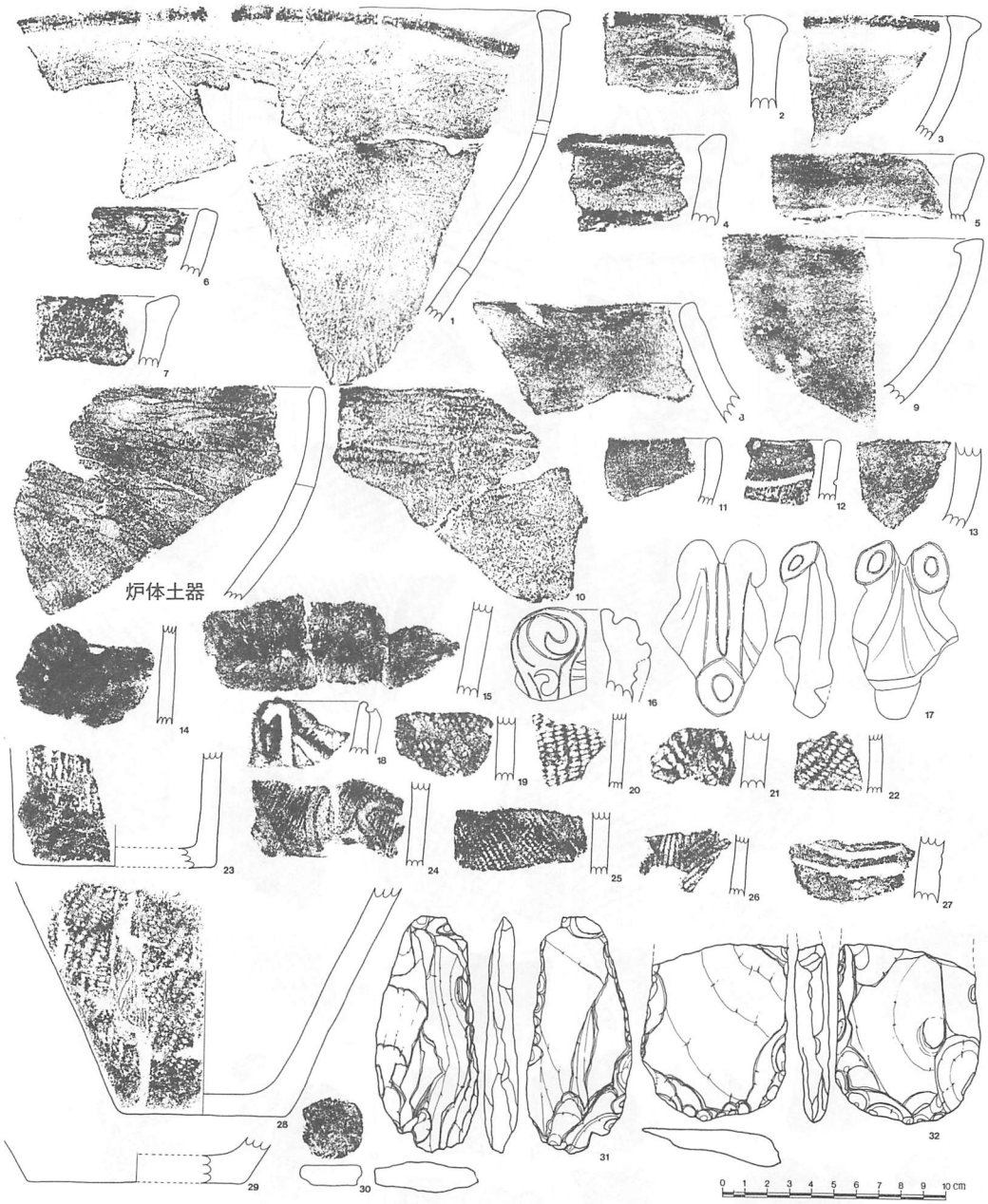


第29図　東台遺跡第10地点　17号住居址出土遺物３（$\frac{1}{3}$）

(4) 17号住居址出土遺物



第30図　東台遺跡第10地点　17号住居址出土遺物４（$\frac{1}{3}$）



第31図　東台遺跡第10地点　17号住居址出土遺物５（$\frac{1}{3}$）

一個体で地文撚糸に貼付隆帯による垂下文をもつ深鉢胴部片で内面に炭化物の付着が著しい。19～25は地文撚糸の胴片で26～39は地文縄文の胴片で，貼付隆帯・沈線・幅狭磨消の懸垂文をもちＥＩ～ＥIIのものである。42～49はこれらの時期に対応する底部片であるが

(4) 17号住居址出土遺物

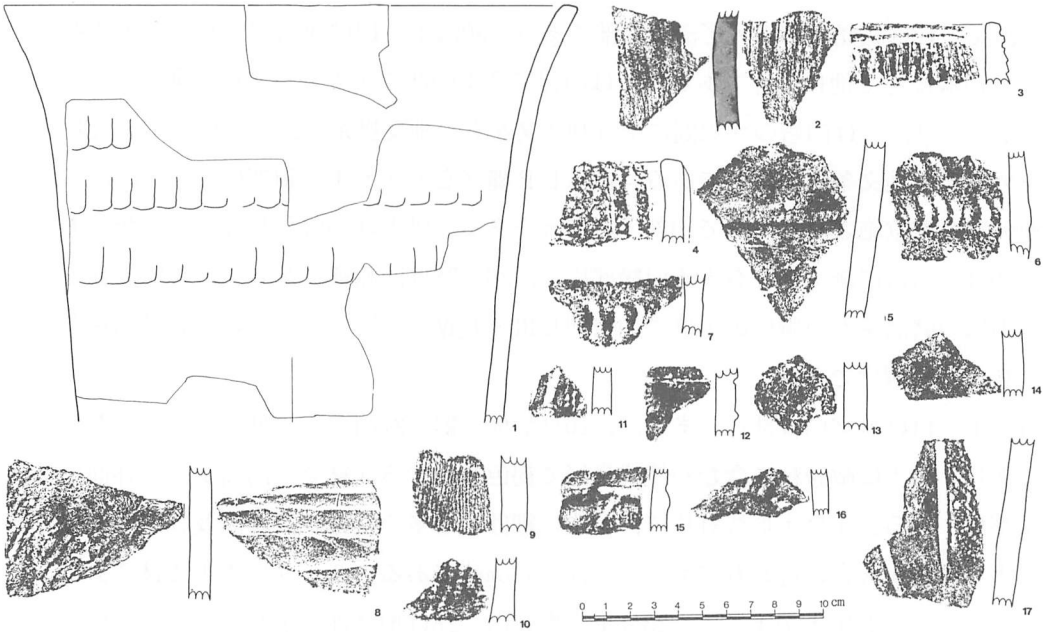
地文縄文の42は底径12cmの大形深鉢底部である。30図１～12は連弧文を有する土器群で，1～3は口縁部片で他は胴片である。１は口縁に２本の沈線をめぐらす地文縄文の上に二重連弧がめぐり，２は口唇の沈線間に交互刺突文をもつ地文撚糸で，３は口唇に交互刺突文帯をめぐらす地文条線の深鉢である。12はＬＲ縄文を地文とする頸部片で２本の沈線による連弧が８単位施される深鉢で頸部径約20cmである。以上は加曽利ＥⅡに伴う類である。16～20は，口唇に無文部を有する口縁部片で，26～38は回転縄文をもち，幅広の弧をもつ又は山形の磨消をもつ胴片の１群で加曽利ＥⅢ・ＥⅣの胴片である。40～43は弧状条線をもつＥⅢ期の胴片である。

31図１～11は無文口縁部片であるが，10は炉体土器（27図１）の外側に配された炉内土器であり，胎土に微砂粒を含むが焼成良好で褐色を呈する浅鉢で，内面上部と外面には磨き調整痕が残る。１は大形浅鉢片で，胎土に細砂粒を多く含むが，外面及び内面上部は磨きによる調整が入念に行われており，口径は43cm強である。３・９は中小浅鉢である。７は下層，他は上層出土である。 23は地文撚糸の，28は地文縄文・29は無文底部片であるが，28は回転施文の縄文に沈線間を磨消した懸垂文が施されておりⅧ群末の，底径7.4cmの深鉢底部である。

第Ⅸ群土器（第31図11～27） 11・12は共に胎土緻密で表面を丁寧に磨いた薄手の波状口縁部片で，11は口縁沿いに沈線が配される。16～18は，波状口縁の波頂部片であり，16は，突端上面に渦文を配し，波頂側に３条の沈線を配し表面中央には回転沈線を施す。17は胎土に細砂粒を多く含み焼成良好で赤褐色を呈するが，隆帯を貼付け外面下方に１，内面外方に２の円形空間を作り出し，蛙状動物を連想させる図形を作り出す。18は波頂部に沈線による直線と曲線を施す薄手で，16～18ともに内・外面に磨調整が施される。19～22は粗い縄文を地文とする施文方向を変える薄手の胴片である。24は地文の細縄文にＪ字状文の区画を沈線で描き，その内部を磨消した胴片である。25・26は細縄文を施文方向を変えて施文した胴細片で胎土に微砂粒を多く含む。27は，沈線のみの部分で２次的破熱による剝離が見られる。

土製品（第31図30）赤褐色を呈する焼成良好で胎土の緻密な無文部片を不整円形に打調整し，やや突出した３ケ所に磨調整の見られる土製円盤である。

石器は打製石斧が２点出土したのみであった。31は正面基部に，裏面中央部に自然面を残す。刃部の調整剝離は，細かい規則的な剝離を施している。磨耗痕は両面刃部に見られる。32は基部を欠損している。刃部には両面から細い調整剝離が施されている。共に砂岩。



第32図　東台遺跡第10地点　18号住居址出土遺物（$\frac{1}{3}$）

(5)　18号住居址（第21図）

16号住居址の西側で隣接して検出された。今回の調査区域内にかかったのが住居址全体の，わずか$\frac{1}{6}$程度のため規模等については不明だが，出土遺物等から阿玉台式期に属すると思われ，当遺跡では初めてのものである。覆土は，しまりの良い暗褐色土が主体である。

18号住居址出土土器（第32図）

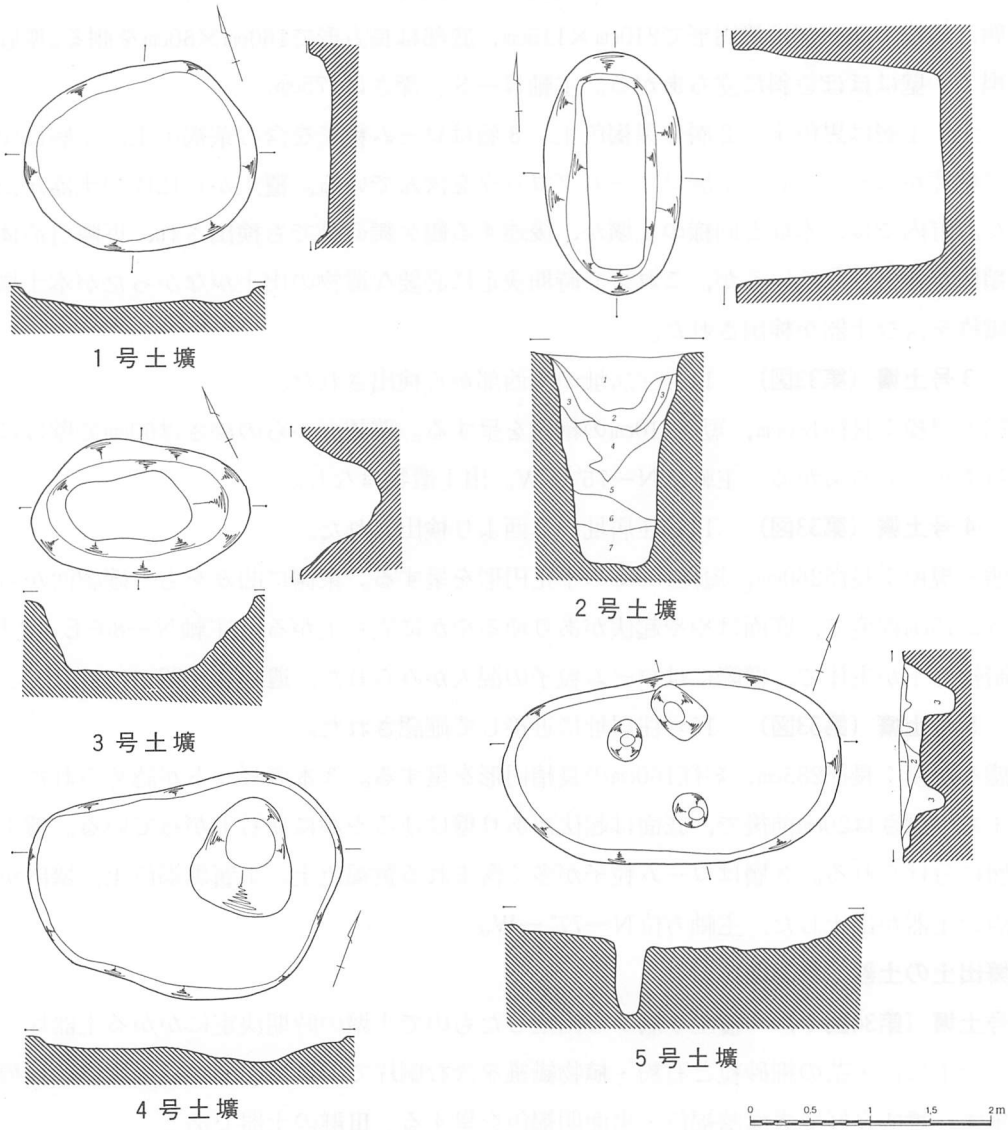
32図１は18号住居址の覆土下層より出土した。推定口径24cm，現存高17.5cmで口縁部がやや外反する。口縁部の文様は残存する破片からは見出せない。ヒダ状指頭圧痕文が残されている。胎土には細石，雲母末を多く含む，焼成は良くない，外面は暗褐色，内面にはススが付着して黒褐色を呈している。阿玉台式期。

第Ⅱ群土器（32図２）尖底深鉢の胴下部片で，胎土に繊維と石・貝粉を含み，表裏とも貝殻腹縁による条痕文が施され，焼成良好で表裏ともに赤褐色を呈する。

第Ⅵ群土器（32図５～７）５～７は，ともに石英粒と多量の雲母を胎土に含む胴片である。５は断面三角の隆帯をもち無文で，６・７はともに爪形圧痕文をもち焼成良好である。

第Ⅶ群土器（32図３・12・15・16）３は刺突押引文をもつ深鉢の口縁部で勝坂Ⅰ（狢沢式）に近い。４は縦方向に２本の隆帯をＲＬ粗縄文の上に施した口縁部片であり，12・15は刺突押引文と微隆帯をもつ胴部で，胎土に白・茶色砂粒を含み表裏ともに明褐色を呈する。Ⅵ・Ⅶ群土器はいずれも下層から出土した。

第Ⅷ群土器(8～11･13･14･17)9は細い条線を地文とする胴片,10はＬＲ縄文を地文とする



第33図　東台遺跡第10地点　土　壙　(1/60)

胴片，11は撚糸を地文として２条の沈線間に幅狭の磨消懸垂文をもつ胴片で，13は無文胴片である。17はＲＬ縄文の上に幅広い磨消懸垂文をもつ胴下半部片で，内面に磨調整が見られ，２次的な強い破熱を受けた痕跡が残る加曽利ＥⅡ～ＥⅢ期のもの。

(6)　１号土壙（第33図）　調査区東側より検出された。

形態と規模：長径195cm，短径160cm。平面形は楕円形，確認面からの深さ15cmで，底面は平坦であり断面は皿状を呈する。主軸はN—73°—W。覆土中から遺物の出土はない。

(7)　2号土壙（第33図）　1号土壙の西側より検出された。

形態と規模：開口部は楕円形で210cm×115cm，底部は長方形で160cm×60cmを測る。壙底は平坦で，壁はほぼ急斜に立ちあがる。主軸N－S。深さは175cm。

覆　土：1層は黒色土。2層は黒褐色土。3層はローム粒子を含む茶褐色土。4層は黒色土で粘性がある。5層～7層はロームブロックを含んでいる。覆土から12片の土器が出土した。町内では，本址と同様の土壙が，後述する鶴ケ舞遺跡でも検出され，近隣自治体でも類例が報告されているが，これまで時期決定に必要な遺物の出土がなかったが本土壙から繊維を含む土器が検出された。

(8)　3号土壙（第33図）　14号住居址の南西部から検出された。

形態と規模：長径180cm，短径110cmの楕円を呈する。確認面からの深さは60cmで壁はほぼゆるやかに立ちあがる。主軸はN—76°—W。出土遺物はなし。

(9)　4号土壙（第33図）　14号住居址の真西より検出された。

形態と規模：長径260cm，短径180cmの不正円形を呈する。東側に凹みをもち確認面からの深さは15cm程度で，底面はやや起伏がありゆるやかに立ち上がる。主軸N—80°-E。覆土は暗褐色土が主体で，壁際にはローム粒子の混入がみられた。遺物は土器が132点出土。

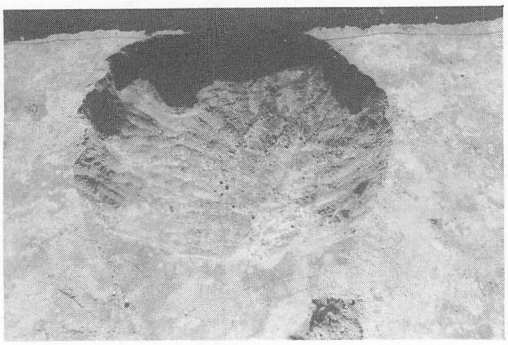
(10)　5号土壙（第33図）　15号住居址に近接して確認された。

形態と規模：長径285cm，短径160cmの長楕円形を呈する。3本のピットが認められた。壙底までの深さは20cm前後で，底面は起伏があり壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は3層に分けられる。3層はローム粒子が多く含まれる黄褐色土。1層黒褐色土，壙内から26点の土器が出土した。主軸方位N—77°—W。

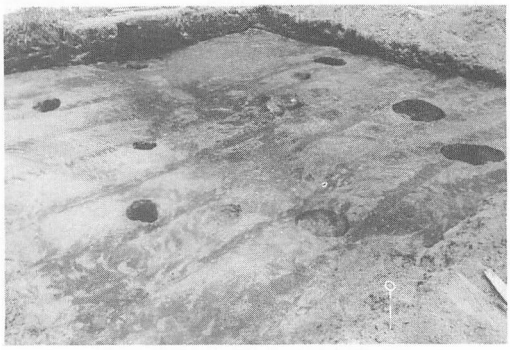
土壙出土の土器（第34図）

2号土壙（第34図1）　覆土6層から出土したもので土壙の時期決定にかかる土器片である。胎土に白・茶の細砂粒と石粉・植物繊維を含む胴片で，無撚の植物繊維原体の圧痕文を施す。焼成良好で表面暗褐色・裏面明褐色を呈する。Ⅲ群の土器である。

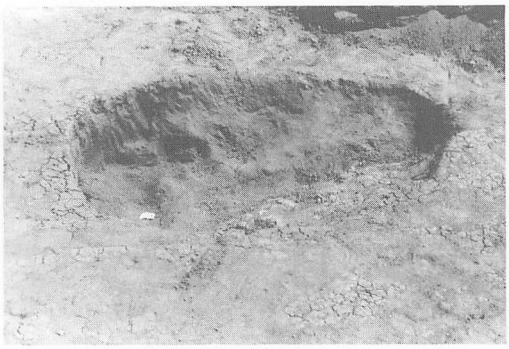
4号土壙（2～37）　2・3は胎土に砂粒と多量の雲母を含む胴片であり，3は断面三角の微隆帯をもち4は2重の角押文をもつ,4～6は胎土に細砂粒を多く含むが雲母を微量又は含まず,4は角押文を楕円区画に沿って施し，5・6は列状の爪形圧痕文を施した1群であり，勝坂式のうち古い類である。7～10は地文縄文に懸垂文を配した深鉢片で7は隆帯による直下・蛇行文をもち，8～9は磨消手法を用いた懸垂文が施され，14は同様手法の底部である。7は加曽利EⅠ期に8～10は同EⅡ期のもの。10～13は細い櫛引条線をもつ類で，11は口縁に無文帯と沈線を施し，12は小形深鉢の口縁で，13は弧状線が地文条線の後に施され，いずれも加曽利EⅢ期に対応する類である。16～31は，縄文又は回転縄文を



西ノ原遺跡第17地点　土　　壙

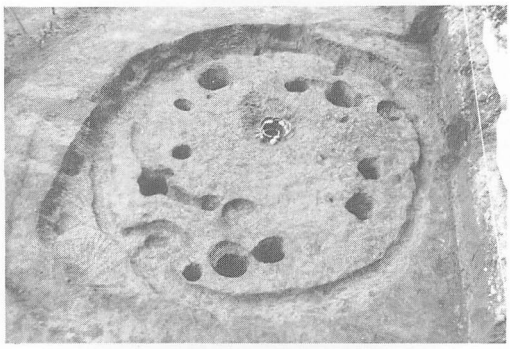


西ノ原遺跡第18地点　1号住居址

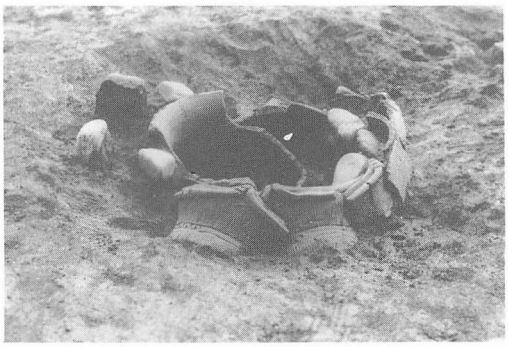


西ノ原遺跡第18地点　土　　壙

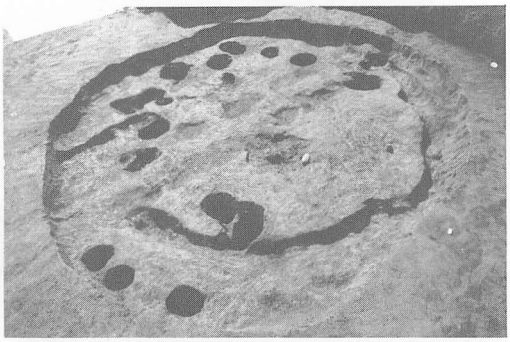
西ノ原遺跡第18地点　ピット群



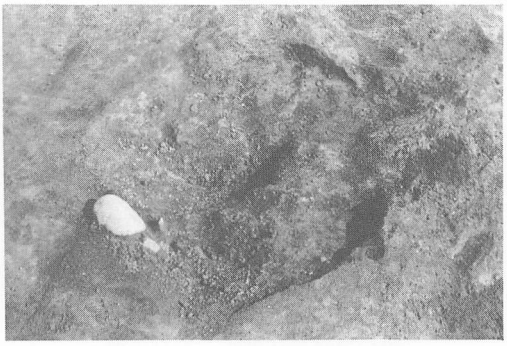
東台遺跡第10地点　14号住居址



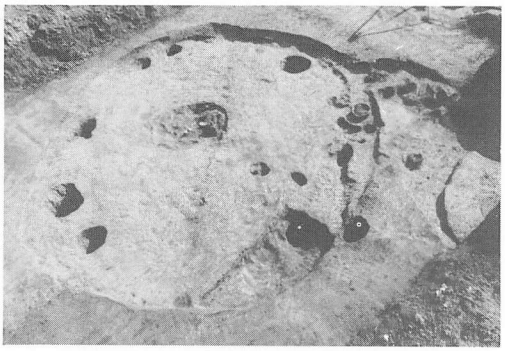
同　　14号住居址　炉



東台遺跡第10地点　15号住居址

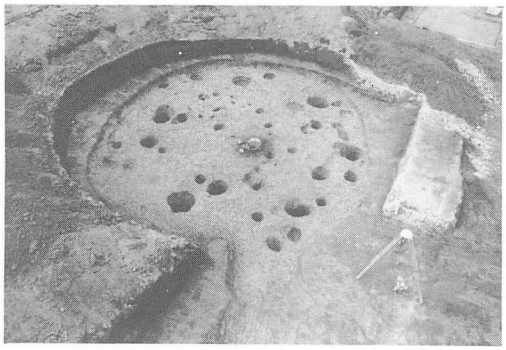


同　　15号住居址　炉



東台遺跡第10地点　16号住居址

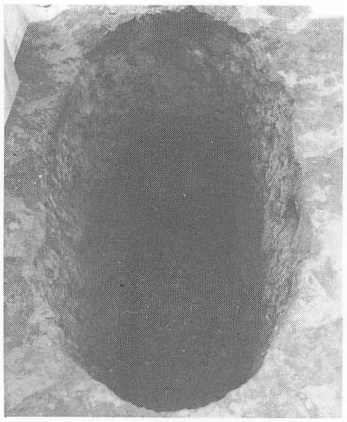
東台遺跡第10地点　16号住居址　埋甕



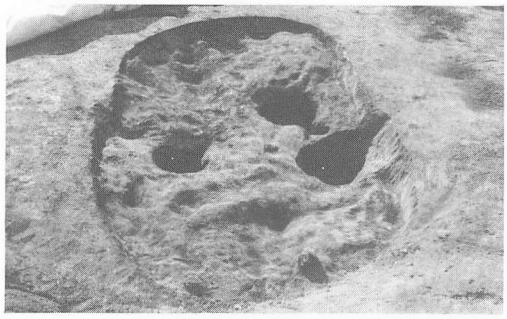
東台遺跡第10地点 17号住居址（南より）

東台遺跡第10地点 17号住居址（西から）

東台遺跡第10地点 17号住居址　　炉



東台遺跡第10地点　2号土壙

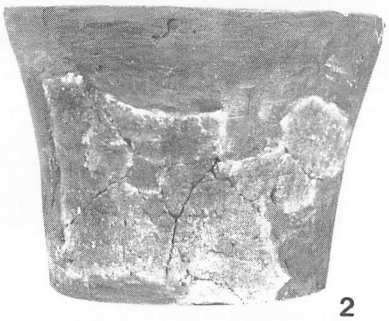


東台遺跡第10地点　5号土壙

東台遺跡第10地点　　作業風景

東台遺跡第10地点出土土器　1.2　14号住居址炉　3.　16号住居址埋甕
4　17号住居址炉　5～7　17号住居址覆土

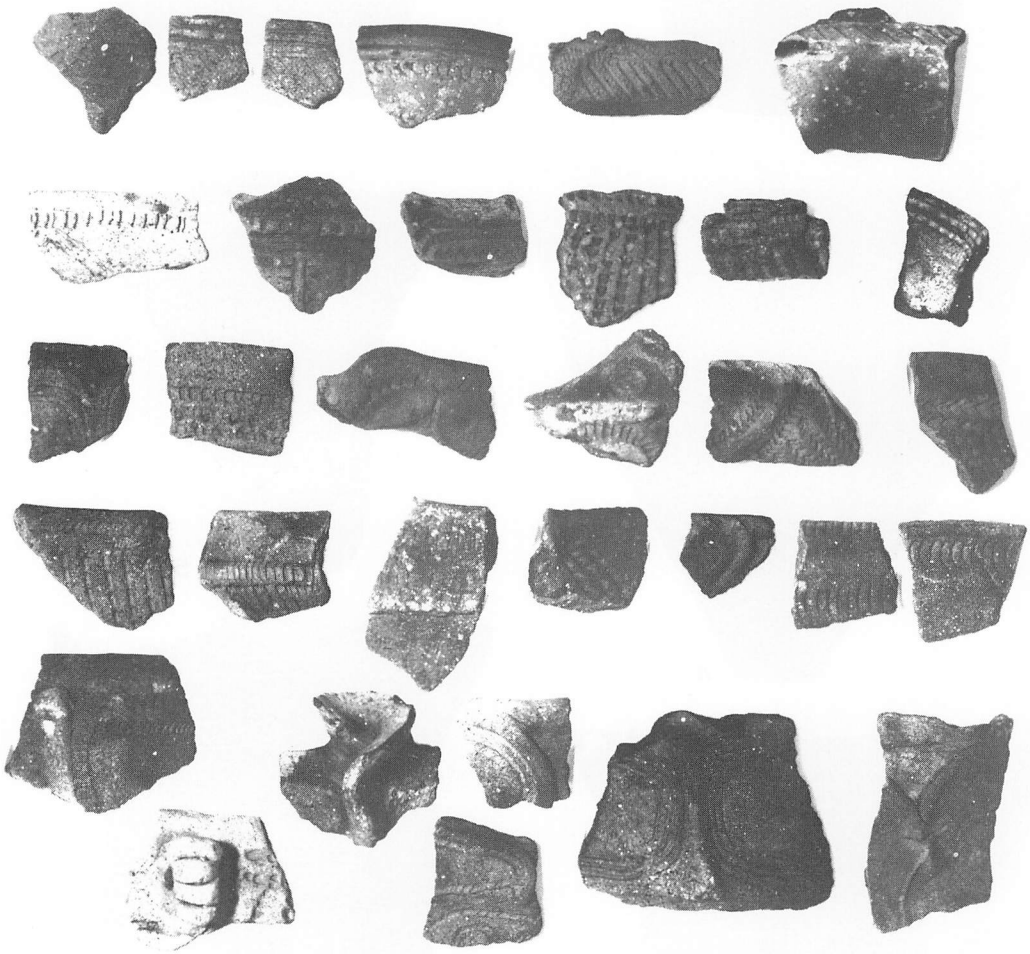
1



2

東台遺跡第10地点出土土器

1. 17号住居址覆土
2. 18号住居址覆土



亀居遺跡第 6 地点出土土器